

第3章 京都大学北部構内B F 32区の発掘調査

富井 眞

1 調査の概要

調査地点は、京都大学北部構内のほぼ中央、北白川扇状地の末端近くに位置する（図版1-299）。ここに総合研究棟の新館が計画されたため、発掘調査を2003年3月21日～9月10日に実施した。調査面積は1900㎡である。

北白川追分町遺跡に含まれる本調査区の周辺では、縄文時代を中心に様々な成果があがっているが、特筆すべきとしては、縄文時代については、中期末の住居跡2基が南方の123地点で確認されているほか、そのすぐ南の12・13地点や本調査区の西隣の135地点では中期後半から中期末にかけての大量の遺物が回収されている。さらには、晩期では、貯蔵穴が西方の229地点で、埋没林が同じく西方の56・135・229地点で、それぞれ確認されている。弥生時代以降については、229地点で弥生中期の方形周溝墓が、東方の221地点では平安時代の邸宅関連遺構や鎌倉時代の砂取穴群が、それぞれ検出されている。

発掘調査の結果、近世の鋤溝群、室町時代の砂取穴、縄文時代中期末の建物跡や焼土や土坑、縄文時代前期以前の旧地表面などを検出した。遺物は、縄文時代から近代におよび、整理箱46箱を数える。

2 層 位

調査前に一帯は果樹園だったこと、調査区北辺以外は、シルト～粗砂からなる縄文時代中期後半以前の洪水堆積層が表土直下の現地表下50cmほどで確認されること、西南および東南は先行建物により攪乱が及んでいたこと、これらによって歴史時代の人間活動の痕跡の確認は限られている。調査区内での土層の残存状態は一様ではないので、数カ所で断面観察をおこなった（図37～40）。洪水砂層より上位の層については、北壁西辺の層位を基本層序とすると（図37）、表土（第1層）、淡灰褐色土（第2層）、灰褐色土（第3層）、茶褐色土（第4層）、硬質茶褐色土（第5層）となる。第5層は、第4層よりも赤味が強く著しく硬く、床土のようである。そして下部には、同様の硬さで黒みがかかる部分もある。第2層は近代初期、第3層は近世、第4・5層は中世後半の地層である。このほかに、洪水砂層に掘り込んだ遺構埋土などのかたちで部分的に認められる地層としては、黒褐色土

京都大学北部構内BF32区の発掘調査

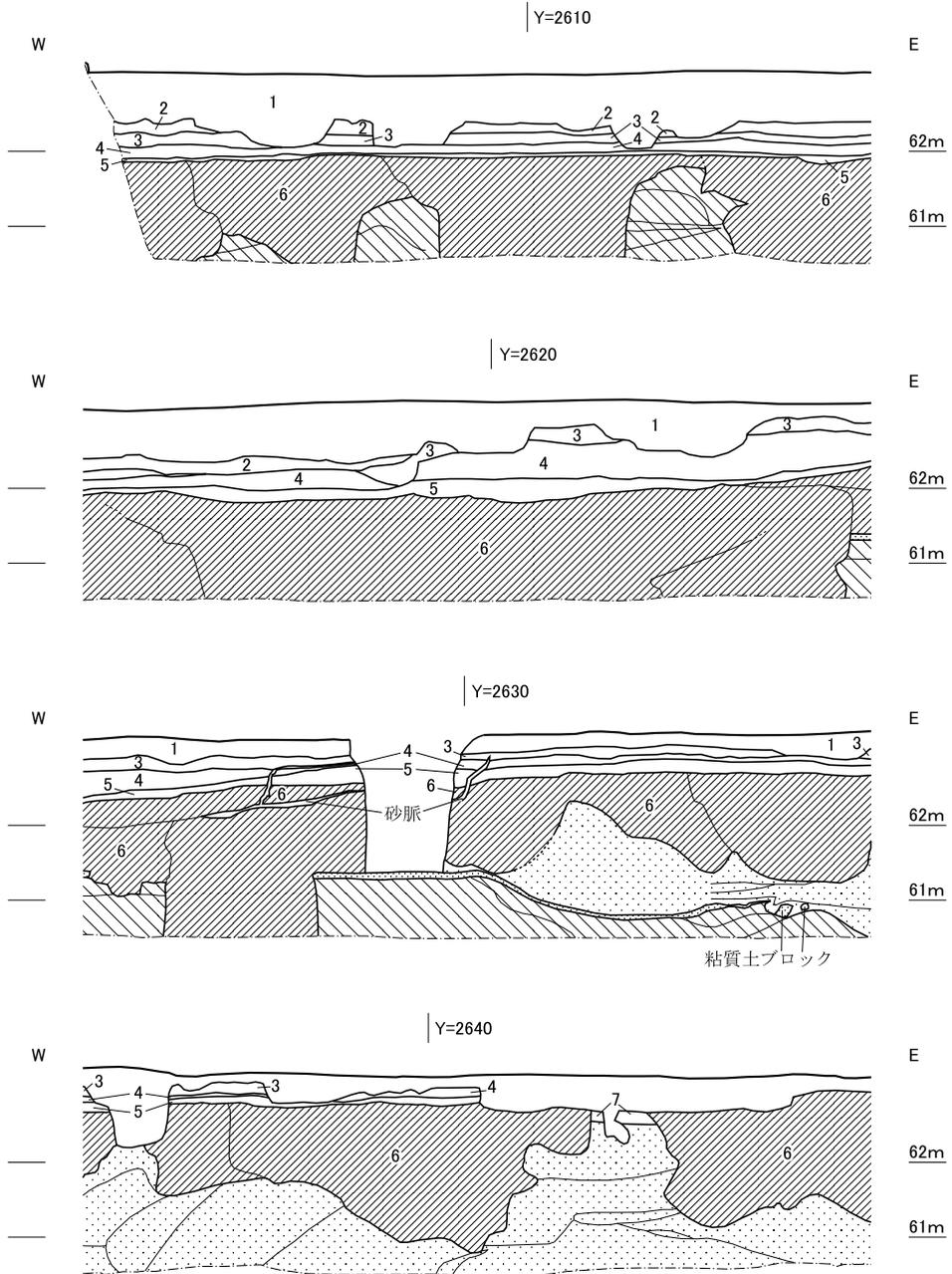


図37 北壁の層位 縮尺1/100

層 位

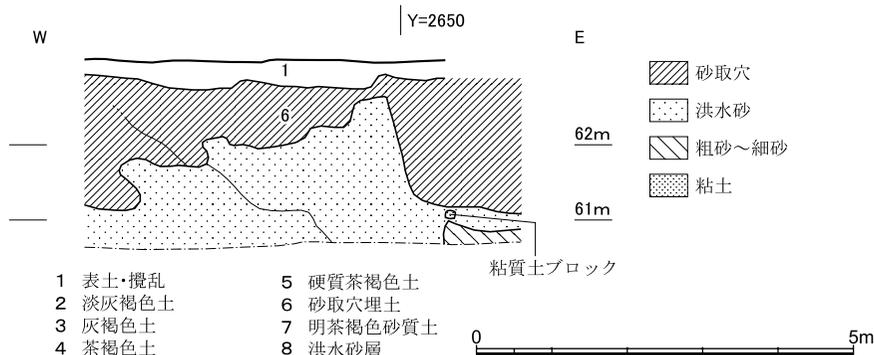


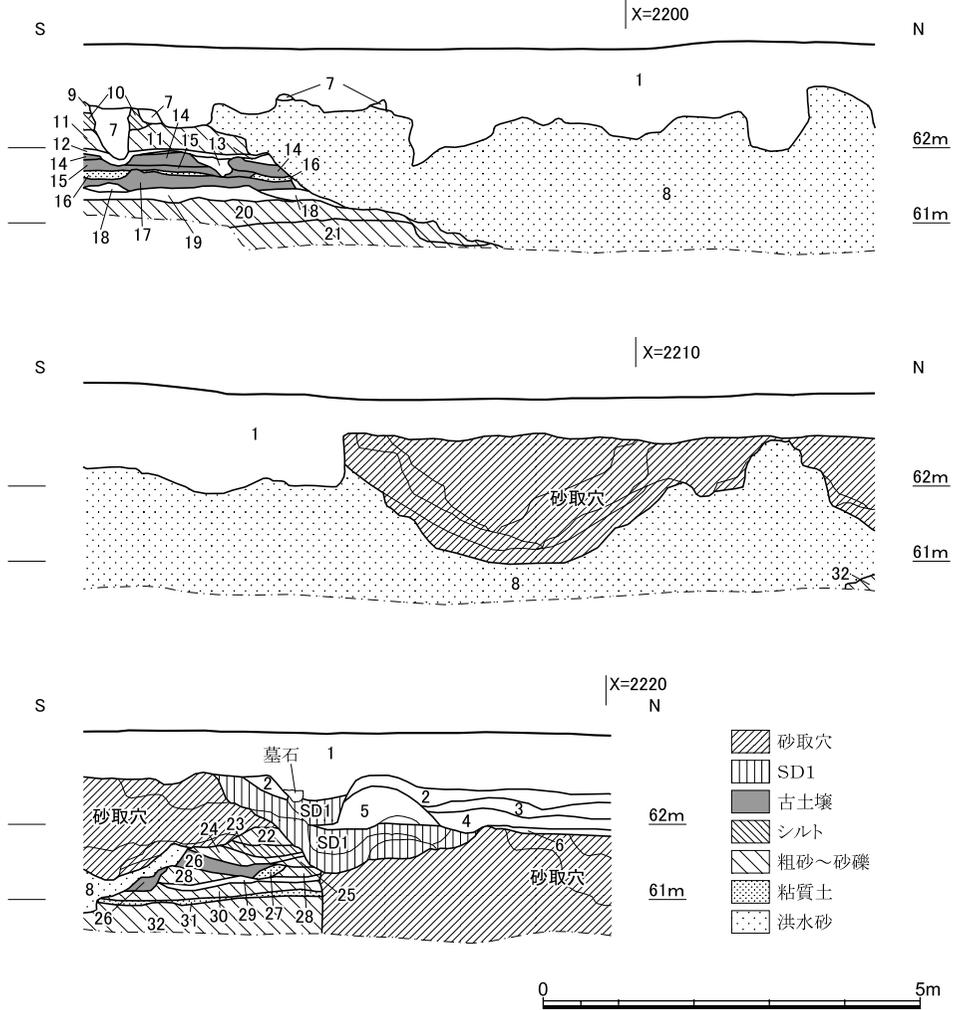
図37つづき

(南北畔第5層：図39)，明茶褐色の砂質土ないしシルト質土（西壁第7層：図38，南北畔第6層：図39）があり，黒褐色土は古代の遺物，明茶褐色砂質土は縄文時代中期後半以降の遺物を，それぞれ包含している。

近世の遺物包含層は北西隅に，中世の遺物包含層は北辺西半に，それぞれ分布するが，そのほかの地点では明確に時代を区分できるこれらの包含層を確認できず，表土除去後に第8層の洪水砂層に達して，この第8層上面に様々な埋土の遺構が確認される状況となっている。洪水砂層は，南半では，シルト質のためか，土壌化している部分が目立つ。そして，東辺と西辺中央ではかなり厚いが，北辺中央付近や西北辺には調査区南半と同様に，暗黒褐色砂質土や黄色がかった粘質土が残存する。南壁際では，この洪水砂層を切るようにそれよりも新しい堆積の黄褐色や黄白色の砂層（南壁第5～7層：図40）が堆積している。弥生前期末の土石流堆積である黄色砂の可能性はある。

北壁第8層・西壁第8層・南北畔第9層となる洪水砂層より下位には，調査区南半を中心にして，主に，黄褐色砂，暗黒褐色砂質土I，黄灰色粗砂，暗黒褐色砂質土II，黄白色粘質土，白色～黄灰色の粗砂などが確認できる（図38～40）。安定した環境下で土壌化の発達した2枚の暗黒褐色砂質土は，いずれもラミナの認められない黄色みがかった砂層に覆われている。遺物は，暗黒褐色砂質土Iから，剝片の可能性のある凝灰岩と思われる微細石片が1点出土したにとどまり，地層の年代を限定することはできない。ただし，土壌サンプルのテフラ抽出分析をおこなった京都フィッシュントラック社によれば，明茶褐色砂質土ではアカホヤ火山灰が認められるのに対して，暗黒褐色砂質土Iの直上の砂層およびそれ以下ではアカホヤ火山灰が認められない。したがって，2枚の暗黒褐色砂質土およびそれを覆った砂層は，いずれも縄文時代前期よりも古いといえる。

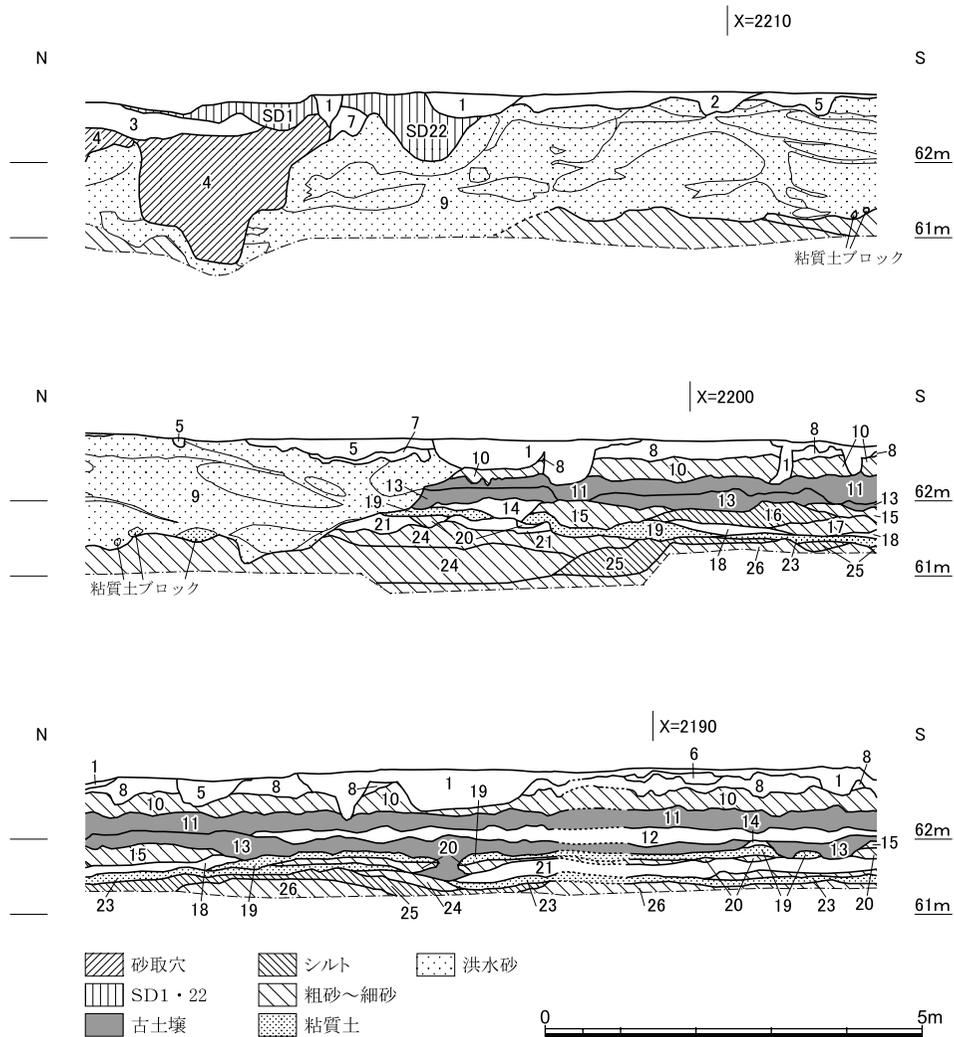
京都大学北部構内B F32区の発掘調査



- | | | | |
|----------------|-----------------|----------------|-------------|
| 1 表土・攪乱 | 9 黄褐色粗砂(土混じり) | 17 暗褐色砂質土 | 25 暗灰色砂礫 |
| 2 淡灰褐色土 | 10 暗灰色砂質シルト | 18 暗灰色砂(土混じり) | 26 暗黒褐色砂質土 |
| 3 灰褐色土 | 11 黄褐色砂 | 19 暗褐色砂礫(土混じり) | 27 黄褐色粘質土 |
| 4 茶褐色土 | 12 暗黄褐色シルト | 20 黄褐色砂礫 | 28 黄褐色砂 |
| 5 暗茶褐色土 | 13 暗褐色シルト(土混じり) | 21 灰白色細砂 | 29 灰褐色砂質シルト |
| 6 硬質茶褐色土 | 14 暗黒褐色砂質土 I | 22 黄褐色粗砂 | 30 黄褐色粗砂 |
| 7 明茶褐色砂質土 | 15 暗褐色砂質土 | 23 灰褐色シルト | 31 黄白色粘質土 |
| 8 洪水砂層(シルト～粗砂) | 16 黄褐色粘質土(砂混じり) | 24 淡黄褐色砂 | 32 灰白色砂礫 |

図38 西壁の層位 縮尺1/100

層位



- | | | | |
|-------------|----------------|----------------|-----------|
| 1 表土・攪乱 | 8 淡黄灰色シルト質土 | 15 暗黄灰色粗砂 | 22 明黄白色粗砂 |
| 2 茶褐色土 | 9 洪水砂層(シルト～粗砂) | 16 暗灰色砂質シルト | 23 黄褐色粘質土 |
| 3 硬質茶褐色土 | 10 黄褐色砂 | 17 黄褐色粗砂 | 24 暗灰白色砂 |
| 4 砂取穴埋土 | 11 暗黒褐色砂質土 I | 18 暗褐色砂(やや土壌化) | 25 淡灰白シルト |
| 5 黒褐色土 | 12 暗黄褐色砂 | 19 黄白色粘質土 | 26 灰白色粗砂 |
| 6 明茶褐色シルト質土 | 13 暗黒褐色砂質土 II | 20 明黄白色粗砂 | |
| 7 砂混黒褐色砂質土 | 14 暗灰色砂質シルト | 21 暗灰褐色砂質土 | |

図39 南北畔の層位 縮尺1/100

京都大学北部構内B F 32区の発掘調査

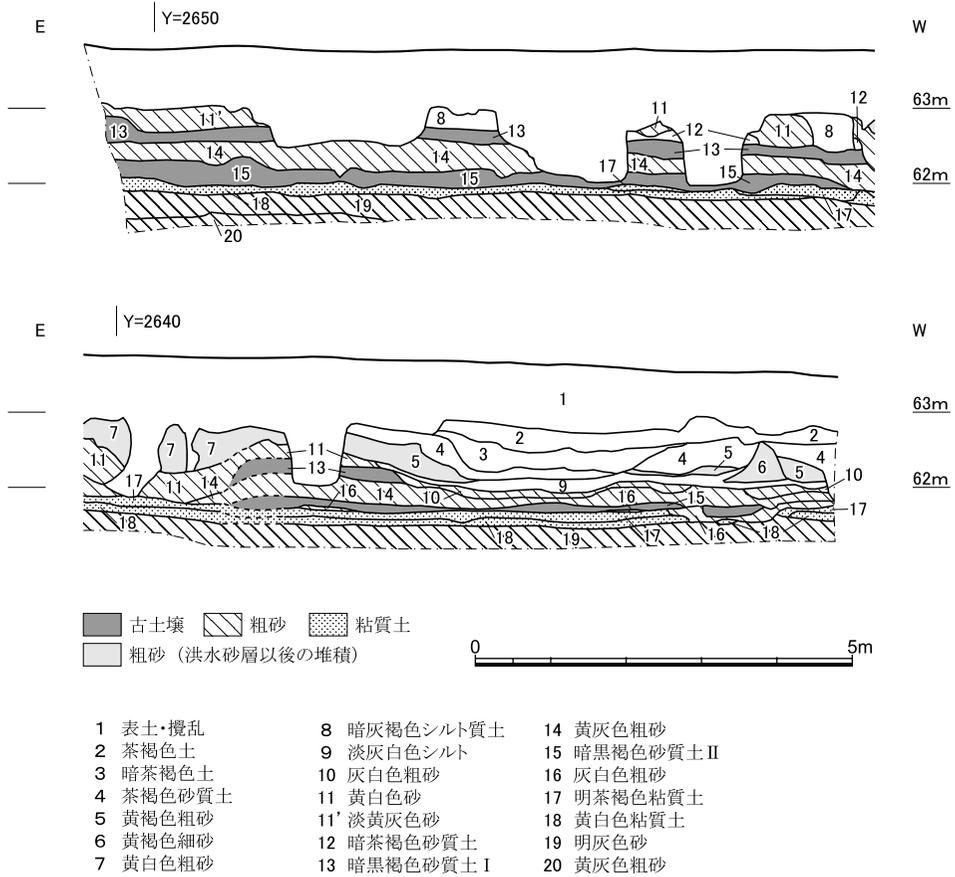


図40 南壁の層位 縮尺1/100

3 遺 構

(1) 先史時代の遺構 (図版 9～12, 図41～45)

S H 1 は、調査区西北辺から中央にかけて確認できた、2列×6列 (以上) の柱穴列 (図版 9-2・11-1, 図41・42)。掘削時にはわからなかったが、直径 1 m 前後で深さが確認面より 50cm 以上あるものを抽出したことによって、柱穴列の存在を推定した。これらの柱穴を内包するような掘り込みは確認できていない。本調査区は調査直前まで果樹園だったことを考えると、植樹用の掘り込みの可能性も否定できないが、これらの柱穴は縄文時代中期末までの遺物しか含まないので、縄文時代の建物跡と考えたい。

S X 3 は、調査区中央南辺の焼土で、この S X 3 を中心に半径 3 m ほどに土坑群がみら

遺 構

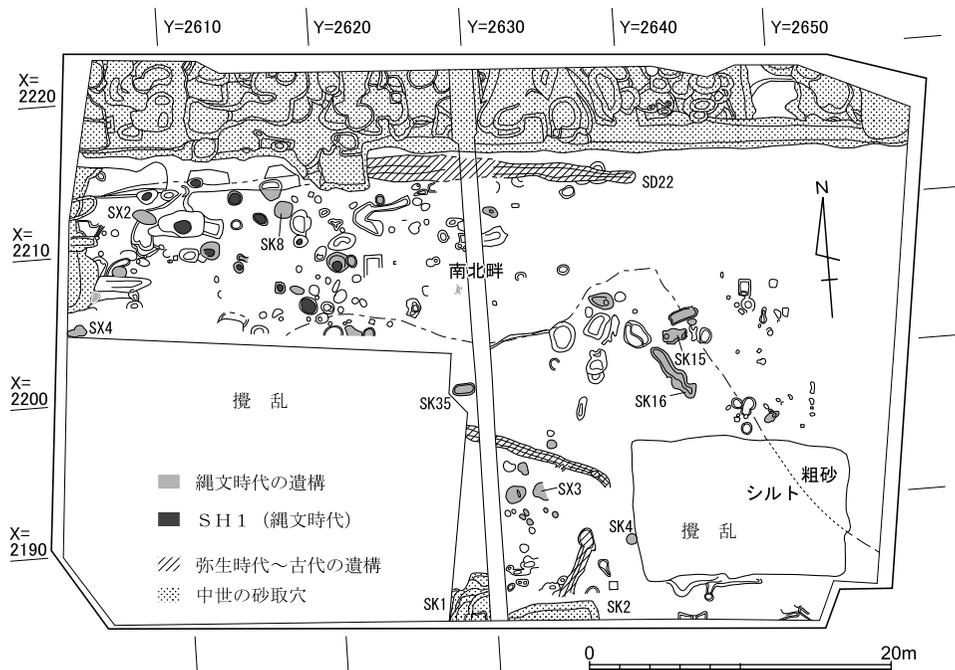


図41 洪水層上面の遺構 縮尺1/500

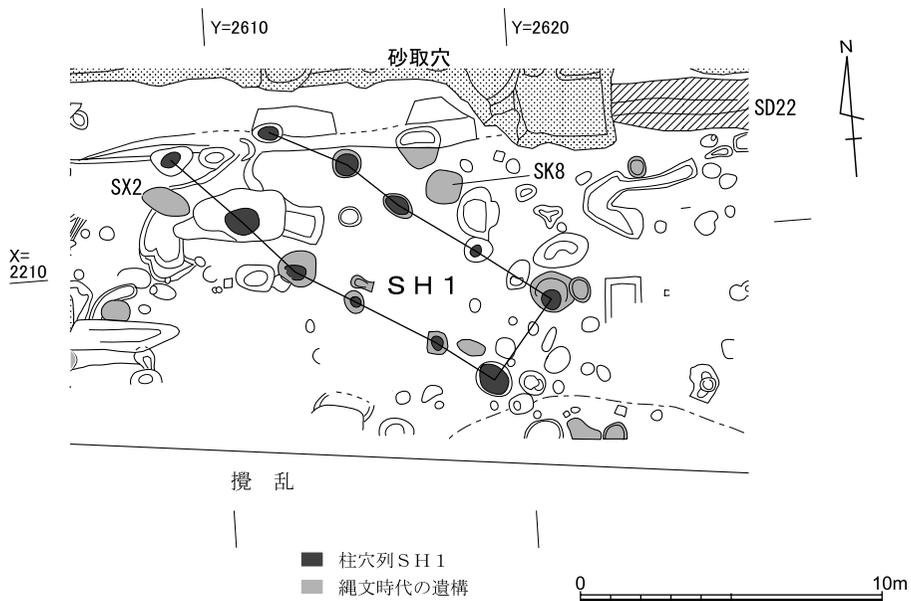


図42 SH 1 縮尺1/250

れる（図版11-2，図41・43）。S X 3とその周辺の土坑群の分布する一帯では，遺構確認面の直上に遺物がややまとまって出土していた点を考慮すれば，これらが住居を構成していた可能性もあるが，床面硬化や壁体は認められなかった。縄文時代中期末である。

S X 4は，西壁際で検出した縄文中期末の土器溜まり（図版11-3，図43）。S X 2も，西北辺で検出した縄文中期末の遺物溜まりで，拳～人頭大の礫も多く出土した。

縄文時代の土坑を20基以上確認しているが，いずれも中期後半～中期末のもので，比較的まとまった量の遺物が出土したのものもある。S K 4は，調査区中央南辺で検出した土坑で，近世の攪乱を受けているけれども縄文時代に形成されており，中期後半の土器を包含する。S K 8は，調査区西北辺で検出した中期末の土器片を多量に含む土坑である（図版11-4）。S K 15は，調査区東辺で検出した土坑で（図版11-5），3基の土坑が切り合っていたと思われるが，出土遺物は，中期末の細片を1点含むほかはすべて中期後半に帰属する。調査区東辺で検出したS K 16は，中期後半から中期末の土坑。S K 35は，中央付近で検出した中期末の土器片を多量に含む土坑（図版11-6）。

このほか，1辺10m以上の方形になると思われる幅約50cmの溝を南辺中央に確認した。S X 3を囲むような位置関係にあるが，埋土が，本調査区内の縄文時代の土坑に一般的な

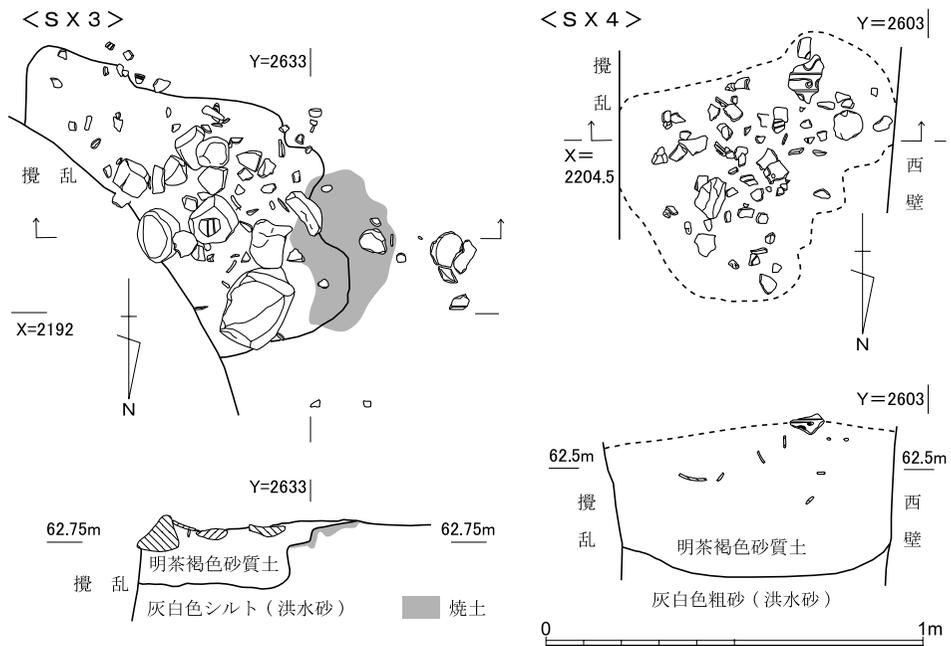


図43 S X 3・S X 4 縮尺1/20

遺 構

明茶褐色土とは異なって暗褐色を呈する。約100m西方に位置する229地点では同様の規模の溝をもった方形周溝墓が確認されていることから、その可能性が考えられたものの、遺物は縄文土器片が数点出土したのみである。弥生時代～古代の溝であろう。

また、遺構は確認できなかったが、洪水砂層（北壁第8層など）の下位から、別のそれ以前の洪水層を挟むように、縄文前期以前の西下りの旧地表面を2面確認した。暗黒褐色砂質土Ⅰと暗黒褐色砂質土Ⅱである（図版10, 図44・45）。どちらの面も、洪水砂層を堆積させた白川系の水流の側方浸食によって、北側が著しくえぐられている（図版12-1・2）。これらの地表面の年代は、前節で触れたように、縄文時代前期より古いということ以上には特定できない。西下りの傾斜は、下位の暗黒褐色砂質土Ⅱの方が緩い。

(2) 歴史時代の遺構（図版9・12, 図41・46・47）

古代の明確な遺構は、調査区北辺中央に位置する、洪水砂層に掘り込んだ11世紀頃の溝SD22のみで、黒褐色土を埋土とする。北側の肩を中世の砂取穴に削平されている。

中世の遺構 北辺では、中世後半期の西へ向けて下がる段差を確認したが、その下位には、粒径が1～5mmほどの白色砂を採取対象としている大規模な砂取穴群が、東西方向

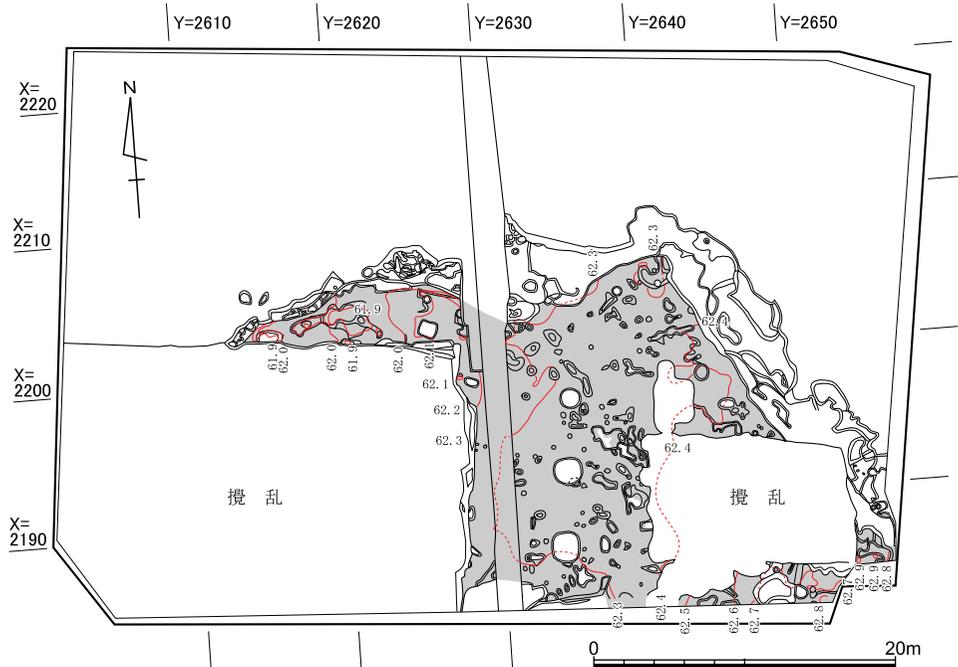


図44 暗黒褐色砂質土Ⅰ上面 縮尺1/500

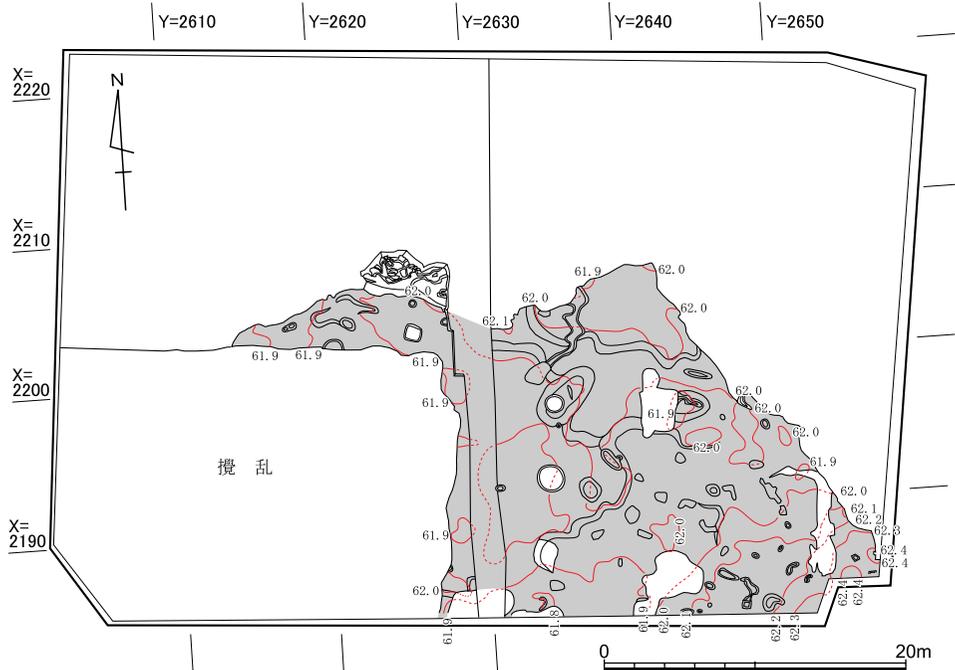


図45 暗黒褐色砂質土Ⅱ上面 縮尺1/500

へと広がっていた(図版9-1)。砂取穴は、深いものは掘り込み確認面から3mの深さにおよび、また出土遺物のもっとも新しいものは14世紀に帰属する。対象となった洪水砂層の分布は調査区一帯に広がるものの、採取用に大規模に掘削されたのは、北辺に偏っている。この砂取穴群は、北壁の断面観察によって(図37)、およそ西から東へと掘削が進んだこと、すなわち、緩やかに西に下がる傾斜にあって低い方から高い方へと採取活動が展開したことがわかるが、発掘中には平面的にこの傾向を把握することはできなかった。砂取穴の埋土は、土壌と土壌化していないシルトや砂が、ときおりサンドイッチ状になりながらも全体的に不規則に分布しているが、埋土最上位ないしは埋土直上には、かなり硬くなった茶褐色土が広がる。なお、埋土から出土した遺物の中でも量が多いのはむしろ縄文土器であることと、埋土の中には褐色土のブロックもしばしば含まれることから、調査区北辺にはかつて縄文時代の包含層が安定的に展開していたと思われる。

このほか、調査区南辺中央壁際で深さ2mほどの円形土坑SK1と深さ1mほどで不定形の土坑SK2を、西辺中央壁際でも深さ2mほどの不定形土坑を、それぞれ部分的に確認している。木桶や石組なども確認できないことから井戸とは思えず、遺物のまとまった

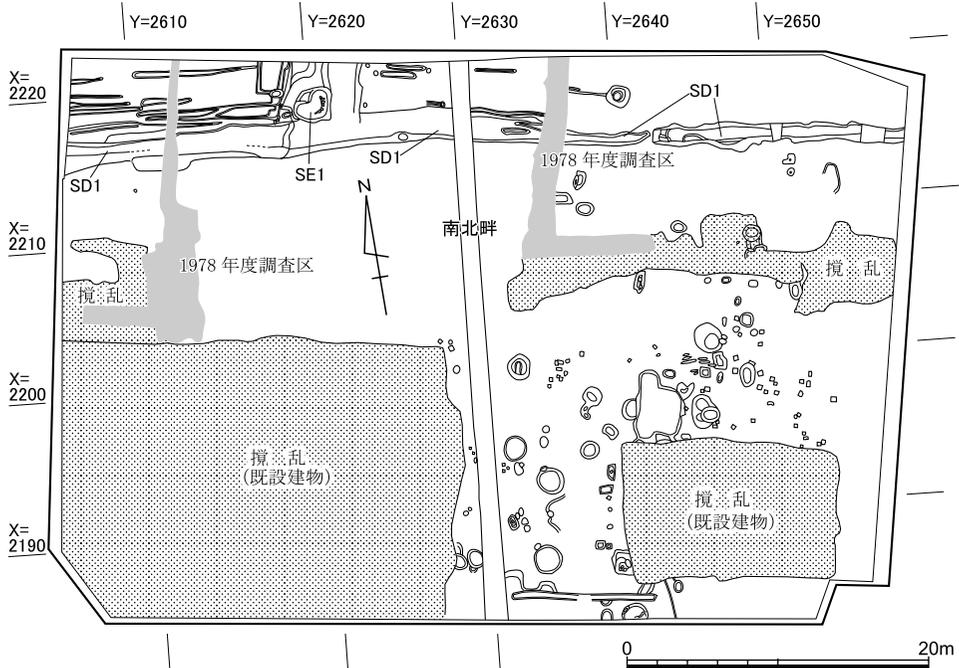


図46 近世・近代の遺構 縮尺1/500

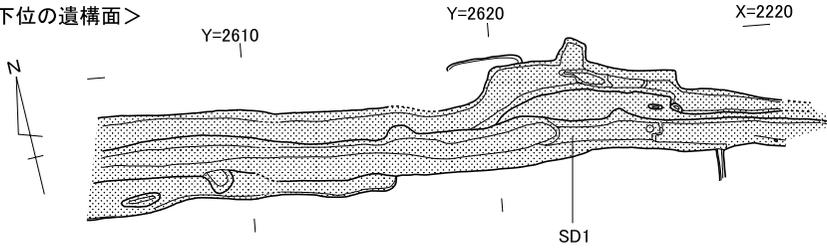
出土もないことから、これらも砂取穴と判断する。いずれも14世紀頃である。

近世・近代の遺構 京都大学がこの地を買収する大正10年頃までの遺構については、調査区北辺に東西方向にはしる溝SD1を検出した(図版12-3, 図46)。少なくとも4度の掘り返しをしていると思われ(図38), 古代から近代に至るまでの遺物を包含している。14世紀の砂取穴よりは新しいので、この溝が最初に掘削されたのは室町時代以後のことであり、また、もっとも新しい段階には、南側の肩に、護岸石ないし化粧として近世の墓石などを転用している。このSD1の北側西半には耕作面を確認している。特に調査区北西隅では、中世後半に設けられた西下りの段差を踏襲しており、その段差の下位で3つの遺構面を確認した(図47)。出土遺物はほとんど細片で、それぞれの面の年代を特定することは困難であるが、層位的には室町時代から大正時代の間におさまる。

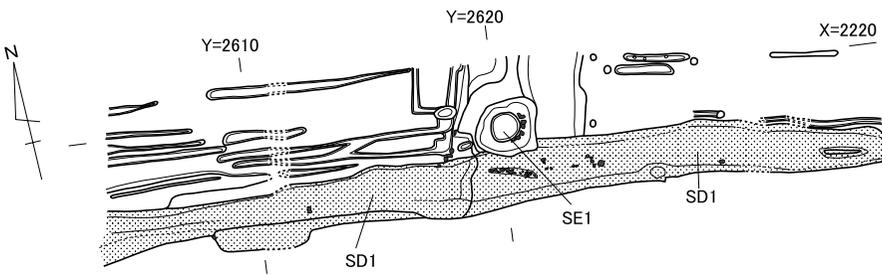
下位の遺構面では、SD1の北側には、溝すらも確認できず、農地だったかどうかはわからない。Y=2620付近の段差もなだらかで不明瞭である。中位の面では、SD1が北肩が南に寄るかたちで幅狭となり、それ以北に数条の細溝が平行して東西にはしる。段差も明瞭となる。農地として利用されていたことが推測できる。江戸時代である。なお、図47

京都大学北部構内BF32区の発掘調査

<下位の遺構面>



<中位の遺構面>



<上位の遺構面>

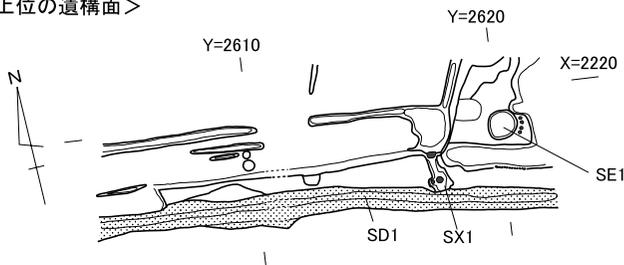


図47 西北辺での中世から近代の遺構群の変遷 縮尺1/300

遺 物

では段差際上位側に野壺SE1を入れたが、この面で存在していたかは不確実である。

最上位の遺構面では、段差際低位側で、SD1からの導水を調節するべく人頭大の礫が据えられた水口SX1を検出したので、水田が営まれていたことは想定できる。また、段差際上位側には野壺SE1がある(図版12-4)。SE1は漆喰製で、京都大学がこの辺りを買収する頃まで機能していたと思われる。側壁は二重、底面は三重となっていて、側壁では内側と外側は接しており、底面でも二段目と三段目は接しているが、底面の一段目と二段目の間には約20cmの間隔がある。漆喰の厚みはいずれも3~5cmである。まず最も大きく深いものを構築し、次いで底浚えをした後に底部のみ漆喰を貼り足し、そして最後に底浚えをしないで内側に入れ子状に作り直したことがわかる。外側の漆喰の東側には、上面が平坦面となって弧状に並ぶ5点の花崗岩が側壁に接して据えられているので、ここが旧地表面となっていた時期があることがわかる。石の上面の標高は、SE1の最上段の底面よりは5cmほど低く、最下段の底面よりは20cmほど高い。下位の遺構面ではまだ構築されておらず、中位の遺構面の頃から機能していたと思われる。最終段階の埋土からは近代の陶磁器などが整理箱2杯分出土しているが、最下段の底面とその上の底面との間の厚さ20cmほどの埋土には遺物がほとんどなかった。

このほか、遺構ではないけれども、北壁で江戸時代の地震による噴砂を確認した(図版12-5, 図37)。砂取穴の埋土を構成している粗砂のまとまりから噴き上がっていることから、14世紀よりも新しいことがわかる。断面観察では、砂脈上部が、灰褐色土と茶褐色土との層理面に沿って横に走っている部分が確認できたので、噴き出しかと思われたためにその層理面を面的に広げて精査したが、当時の地面に噴出していた痕跡をとどめているとは判断できなかった。そして別の砂脈は灰褐色土中で消えていることから、近世のある段階にこの噴砂が生じたものと考えられる。

4 遺 物

(1) 縄文時代の遺物(図版13~20, 図48~65)

先史時代の遺物の中では、弥生時代の遺物は見られず、3000点あまり出土している縄文土器のなかでも、95%以上が中期の土器で、晩期の土器が100点弱、早期や前期や後期のものは10点にも満たない。石器は多く出土し、失敗品も含めた剝片石器は、石鏃約60点のほかに数点の石匙や石錐や楔形石器、20点ほどのスクレイパー、3点の石核、20点近い剝片などがあり、9割ほどがサヌカイトである。礫石器も、磨製石斧、打製石斧、石皿・台石、

凹石・磨石、がそれぞれ数点と、切目石錘が5点以上出土している。

以下では、遺物量の点で比較的まとまりのある遺構の出土土器を、口縁部破片を中心に報告する。なお、中期末の北白川C式の分類は、泉拓良〔泉1985〕に準拠する。

SK4出土遺物（Ⅱ1～Ⅱ18） Ⅱ1は外面の縄文施文後に口唇部をつまむように撫で、その後に口縁の内面には縄文を施し外面には半截竹管状工具による2条の蛇行沈線を施す。Ⅱ2・Ⅱ3は外反口縁で、口縁の内外面に縄文をもつ。Ⅱ4の口縁内面は、絡状体圧痕文ないしは外面と同様の深淺縄文を施した後にその下方を撫でている。Ⅱ5～Ⅱ7は口縁部から頸部にかけての破片。頸部無文帯の下端のⅡ5には、半截竹管状工具による蛇行沈線が確認できる。Ⅱ6は、垂下していく条の間隔が広い撚糸文に棒状工具による沈線をもつ口縁部破片。Ⅱ7は隆帯脇を半截竹管状工具による沈線がはしる。Ⅱ8は胴上部で、Ⅱ9～Ⅱ16は胴下部である。Ⅱ17・Ⅱ18は底部で、Ⅱ17は平底気味だが、Ⅱ18は凹底。

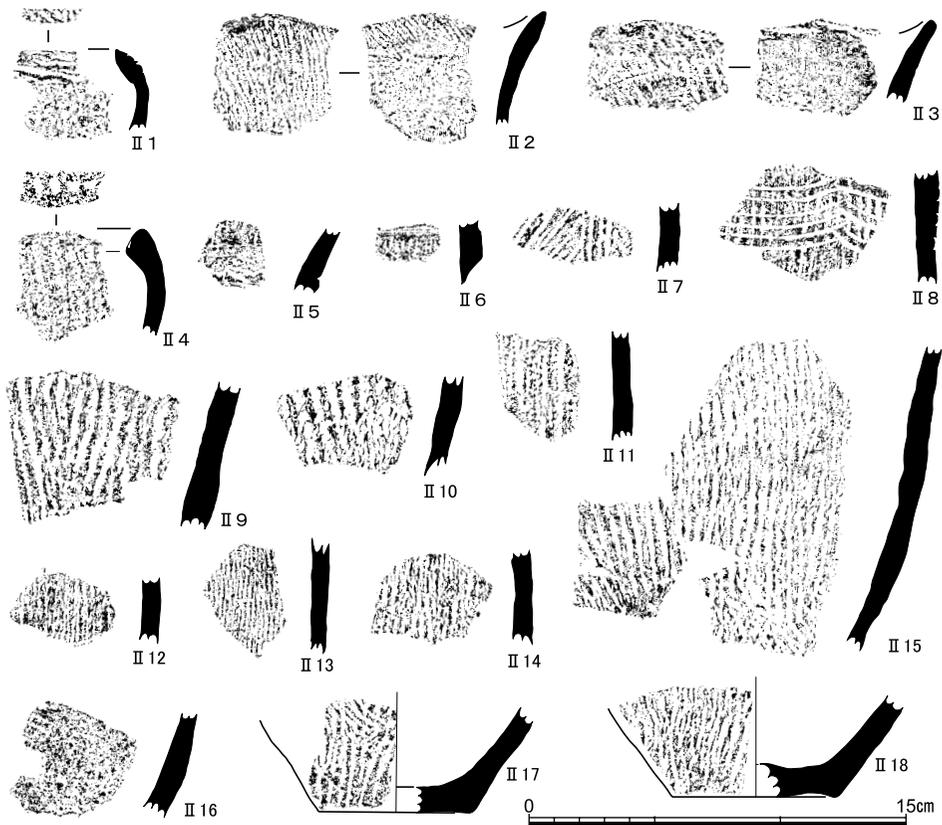


図48 SK4出土遺物（Ⅱ1～Ⅱ18中期） 縮尺1/3

縄文原体は、Ⅱ4・Ⅱ7・Ⅱ9～Ⅱ11は深淺縄文で、Ⅱ16は無文だが、そのほかは撚糸文であろう。

この遺構自体は近世の撓乱を受けているが、出土した縄文土器はすべて縄文中期後半におさまり、Ⅱ4・Ⅱ7・Ⅱ9～Ⅱ11は船元Ⅳ式、Ⅱ6は里木Ⅱ式におよそ併行する東海地方の中富式、Ⅱ16を除くそのほかのものは里木Ⅱ式、とそれぞれ理解できる。なお、Ⅱ16は、この時期の胴部縄文施文は底部付近まで及ぶのが通例なので、無文土器と思われる。

S K 15出土遺物 (Ⅱ19～Ⅱ55) Ⅱ19～Ⅱ25は口縁部。Ⅱ19・Ⅱ20は口縁内面に縄文をもつ。Ⅱ21は口唇部をつまむように撫でた後に外面には半截竹管状工具による蛇行沈線を施す。Ⅱ22は、著しく内湾した口縁に3条の隆帯を貼付し、口縁部には2条の横走沈線、それ以下には縦走する多重の短沈線がそれぞれ巡り、貼付隆帯以下は長めの沈線が縦走する。また、口唇部にはD字状の刻みをもつ。橙色を呈して胎土に長石粒の目立つⅡ23は、口縁の外面を丁寧に撫でた後に棒状工具による2条の沈線を施し、その後に沈線間を棒状工具で刺突している。このように、交互刺突ではなく沈線間の刺突をするのは、中富式に特有の手法である。Ⅱ24は口唇部に粘土を貼付しながら撫でつけているが、外面の縄文はそこまでおよばないので縄文との先後関係は不明。Ⅱ25は外面無文だが、口唇部を棒状工具によって刻んでいる。

Ⅱ26～Ⅱ31は口縁部から頸部にかけての破片。暗褐色を呈するⅡ27には、棒状工具による2条の弧線文が認められる。Ⅱ29は無文なので頸部と判断したが、中富式の胴下部の可能性もある。Ⅱ32～Ⅱ34は胴上部、Ⅱ35～Ⅱ54は胴下部、Ⅱ55は底部。このうち、Ⅱ52は、中期末の北白川C式の胴部で、Ⅱ53・Ⅱ54は無文。縄文原体は、Ⅱ19・Ⅱ20・Ⅱ35～Ⅱ40は深淺縄文で、Ⅱ22・Ⅱ25・Ⅱ27・Ⅱ29・Ⅱ31・Ⅱ53・Ⅱ54は無文だが、そのほかは撚糸文であろう。

この遺構は、Ⅱ52の1点のみ中期末の北白川C式の出土を見たが、そのほかの縄文土器はすべて縄文中期後半におさまり、Ⅱ19・Ⅱ20・Ⅱ35～Ⅱ40は船元Ⅳ式、Ⅱ23は中富式、Ⅱ27・Ⅱ53・Ⅱ54は中富式ないし咲畑式、Ⅱ22を除くそのほかのものは基本的に里木Ⅱ式として、それぞれとらえられる。Ⅱ22は、東海地方西部に散見できる、船元Ⅲ式の在地的展開を遂げた船元Ⅳ式／里木Ⅱ式に併行する土器であろう。

S K 16出土遺物 (Ⅱ56～Ⅱ89) Ⅱ56～Ⅱ62は中期後半の口縁部。有文のⅡ56～Ⅱ60はいずれも半截竹管状工具を用いている。Ⅱ63は北白川C式の口縁部。Ⅱ64～Ⅱ71は中期後半の土器の口縁部から頸部にかけての破片。沈線が確認できるものはいずれも半截竹管

京都大学北部構内B F32区の発掘調査

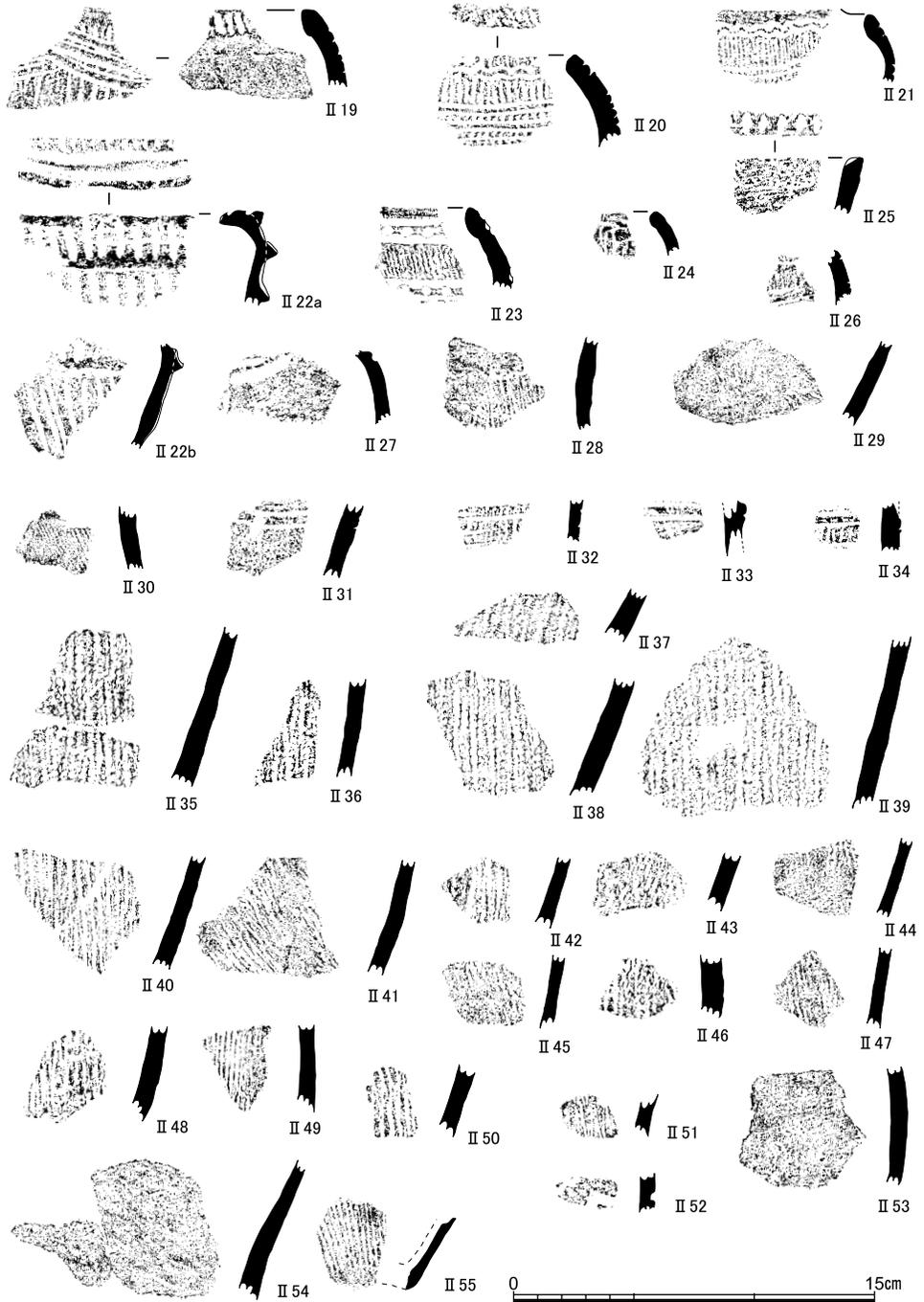


図49 S K15出土遺物 (II 19~II 55中期) 縮尺1/3

遺 物

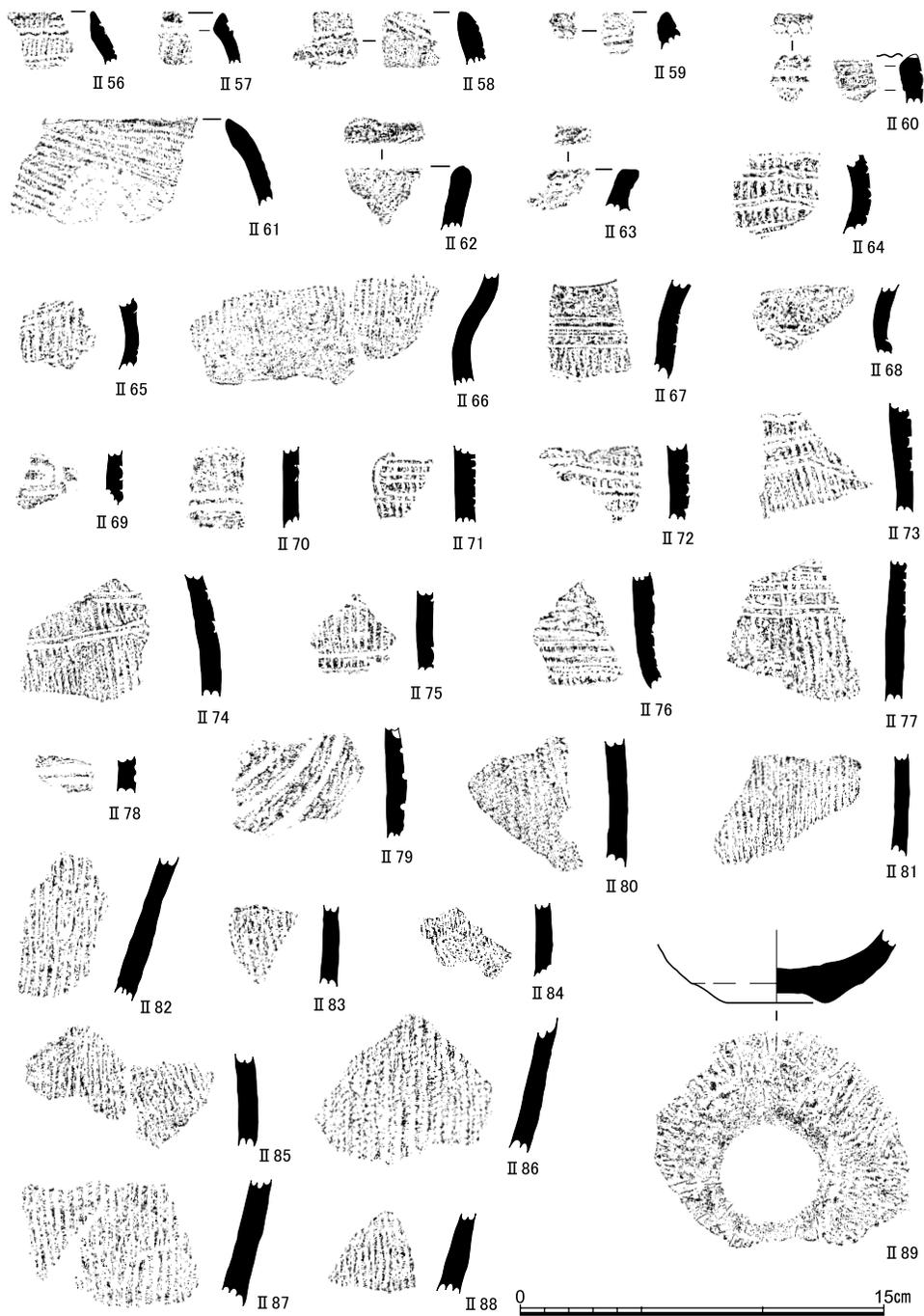


図50 S K16出土遺物 (II 56~II 89中期) 縮尺1/3

状工具を用いている。Ⅱ72～Ⅱ77は中期後半の土器の胴上部の破片。これもいずれも半截竹管状工具を用いている。Ⅱ78～Ⅱ80は、棒状工具を用いた有文土器の胴部破片で、いずれも北白川C式である。Ⅱ81～Ⅱ88は中期後半の胴下部で、Ⅱ89は、里木Ⅱ式に典型的な凹底の底部。

ここに図示した中期後半のもの内では、Ⅱ65・Ⅱ72・Ⅱ81・Ⅱ86は船元Ⅳ式に帰属すると思われる。なお、図示していない個体も含めて、深淺縄文や撚糸文をもつ有文土器の沈線はいずれも半截竹管状工具を用いている。

S X 3とその周辺のピット出土遺物（Ⅱ90～Ⅱ141） Ⅱ90～Ⅱ133は、S X 3の焼土およびその周囲から出土した土器。Ⅱ90～Ⅱ102は深鉢A類の口縁部で、Ⅱ103～Ⅱ107は深鉢C類の口縁部。Ⅱ108～Ⅱ114は縄文のみで沈線施文のない口縁部。Ⅱ115～Ⅱ120は、口縁部と胴部を隆帯で区分している胴上部付近で、Ⅱ121～Ⅱ124は、隆帯の確認できない胴上部。Ⅱ117は、胴部施文に櫛状工具を用いている点で、中部地方西部の特色を備えていると言える。Ⅱ121・Ⅱ122は深鉢C類であろう。Ⅱ124はボウル形の浅鉢の可能性もある。Ⅱ125は胴下部である。Ⅱ126～Ⅱ128は深鉢底部で、Ⅱ128には横走る縄文が確認できる。Ⅱ129は有文浅鉢の口縁で、Ⅱ130は横位穿孔のある無文浅鉢の口縁部。Ⅱ131は有文浅鉢の屈曲部。Ⅱ132・Ⅱ133は外面調整が磨きないし丁寧な撫での浅鉢胴部だが、口縁部に文様をもつかどうかはわからない。

Ⅱ134～Ⅱ141はS X 3周辺のピットから出土したもので、Ⅱ134は深鉢A類、Ⅱ135は深鉢B類、Ⅱ136は深鉢C類の、それぞれ口縁部。Ⅱ137は深鉢A類ないしB類の、口縁部の楕円形区画文の充填部分。Ⅱ138・Ⅱ139は、口縁部と胴部を隆帯で区分している胴上部付近で、Ⅱ140は隆帯の確認できない胴上部。Ⅱ141は口唇部と口縁内面に縄文をもつ、皿状の浅鉢の口縁部。

図示した以外に、S X 3の周囲とその周辺のピットからは、サヌカイトやチャートなどの剥片石器も出土している。また、最大で幼児胴体ほどの大きさに達するものも含めて多数の閃緑岩や斑^{はんれい}礫岩も出土しているが、定型的な礫石器と思われるものはなかった。

S X 4出土遺物（Ⅱ142～Ⅱ162） Ⅱ142は深鉢A類と思われる。北白川C式には珍しく、胴部は横走縄文が沈線に先行している。Ⅱ143は深鉢B類の口縁部で、眼鏡状の楕円形区画文の上方にも縄文を施文している。Ⅱ144は深鉢C類の波頂部で、筒形になるところの側面部。Ⅱ145は、縄文のみの認められる口縁部破片だが、深鉢B類の可能性もある。Ⅱ146は、深鉢A類ないしB類の口縁部楕円形区画文の充填部分。Ⅱ147は口縁部と胴部を

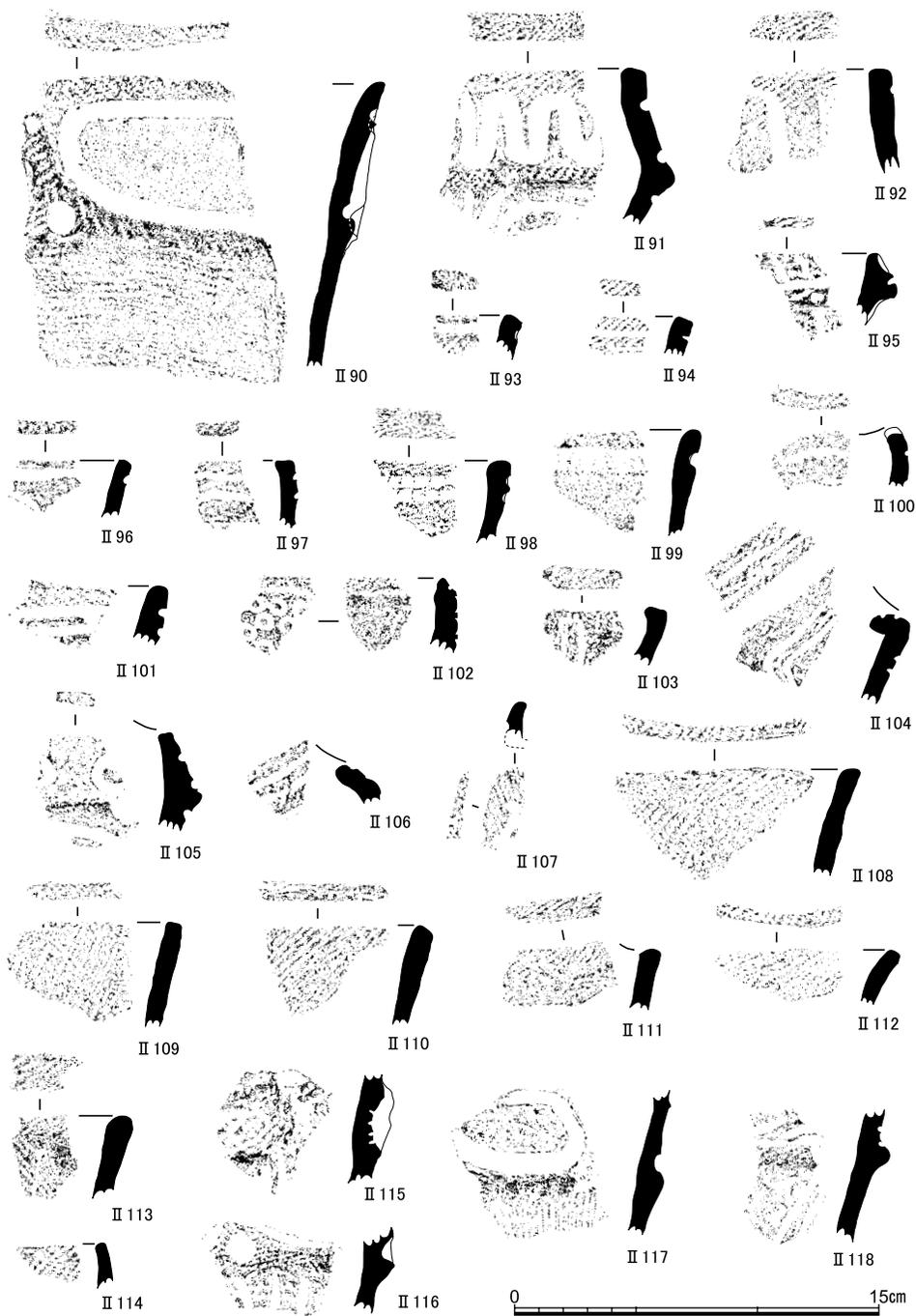


图51 S X 3 出土遺物(1) (II 90~ II 118中期) 縮尺1/3

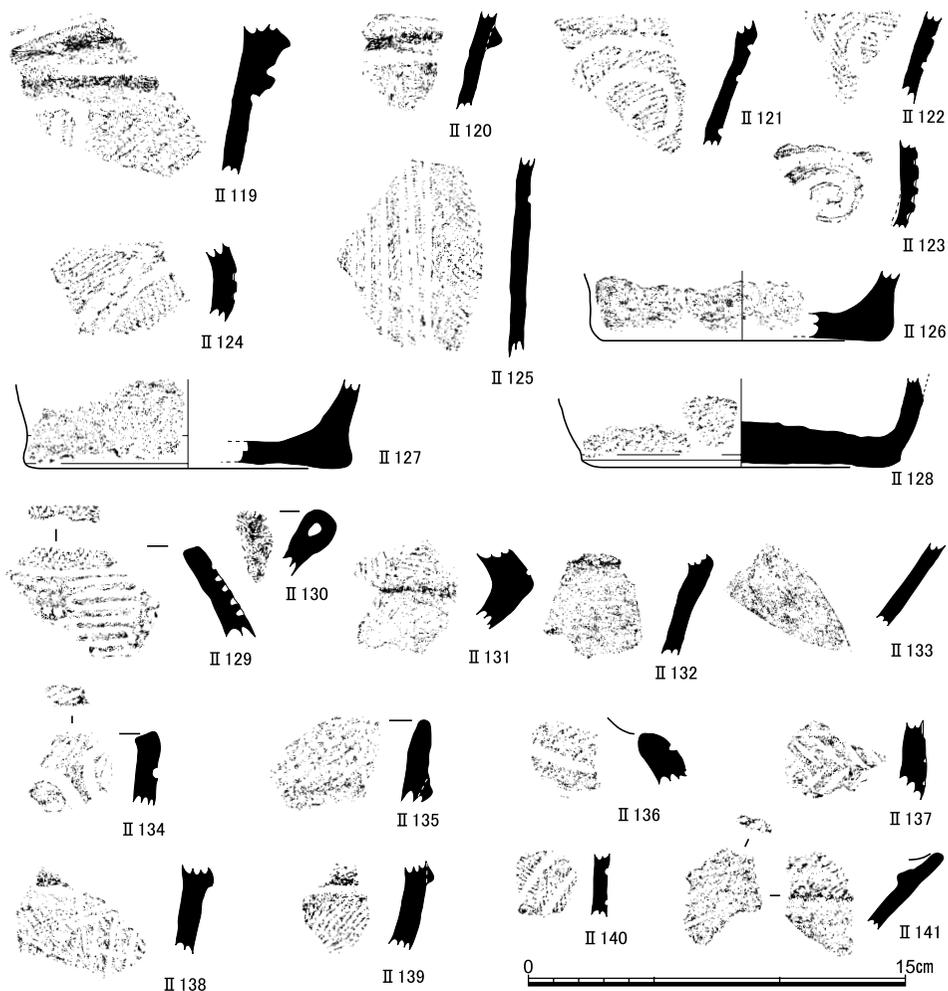


図52 S X 3 出土遺物② (II 119～II 133中期), S X 3 関連ピット出土遺物 (II 134～II 141中期)
縮尺1/3

隆帯で区分している胴上部付近。II 148は縦位に隆帯がはしる。口縁部と胴部を描すことのない大型の鉢かもしれない。II 149は、深鉢C類と思われる胴部。沈線間を縄文で充填しているが、胴部の紡錘文の下部には横走縄文が展開する。II 150～II 158は深鉢胴下部。II 150～II 154は沈線間を縄文で充填しているが、II 155は縄文を確認できない。II 156は帯縄文で、II 157は横走縄文だが、II 158は施文が認められない。II 159・II 160は深鉢底部。II 161は内面を磨いているのでボウル形の壺の胴下部と判断した。II 162は外面を磨いている浅鉢の胴下部。「く」字形になるだろう。

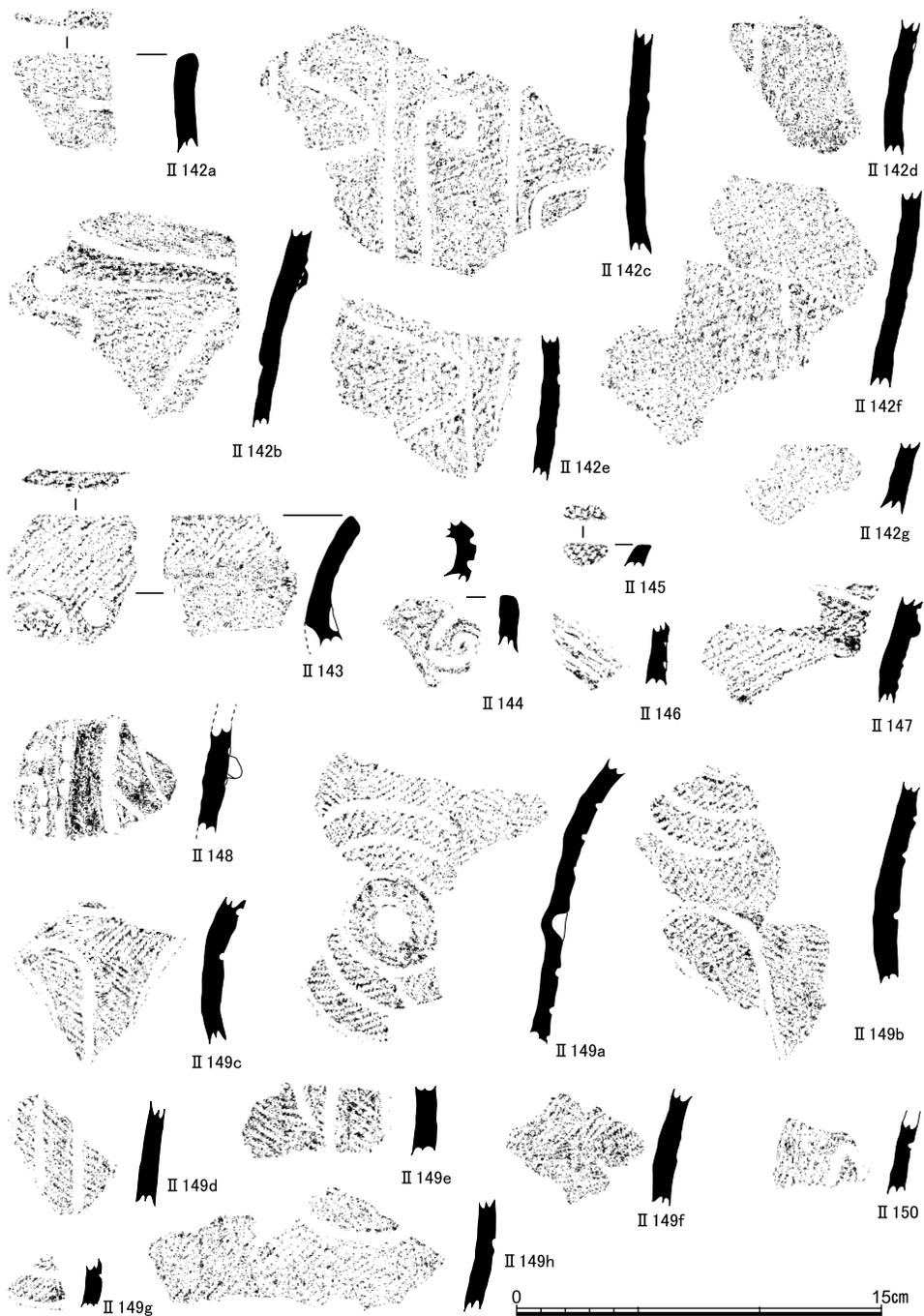


図53 S X 4 出土遺物(1) (II 142~II 150中期) 縮尺1/3

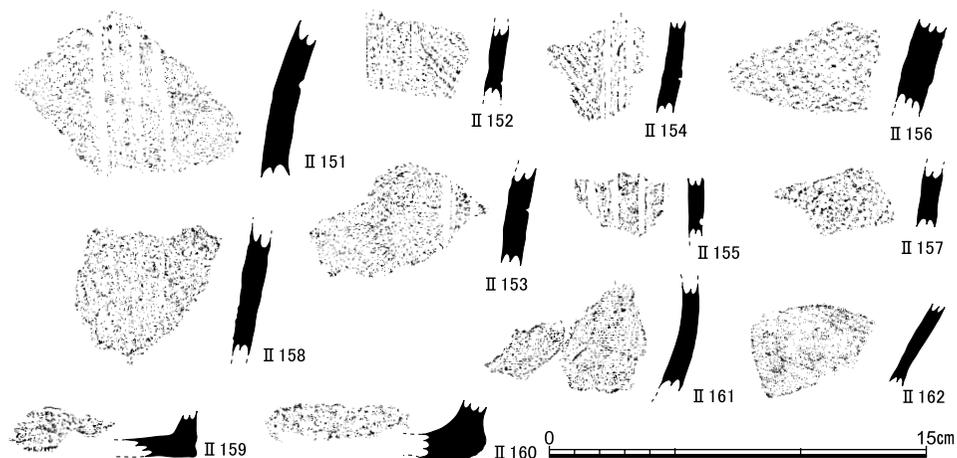


図54 S X 4 出土遺物(2) (II 151～II 162中期) 縮尺1/3

S X 2 出土遺物 (II 163～II 185) II 163～II 168は深鉢A類。II 163・II 166は口唇部の縄文施文後に口縁内面を撫でている。II 169～II 175は深鉢C類。II 169・II 170は同一体の可能性がある。II 176～II 178は縄文のみの口縁で、いずれも口唇部にも縄文をもつ。II 179は、口縁部と胴部を隆帯で区分している胴上部で、胴部は縄文施文後に沈線を引いている。II 180は深鉢B類と思われる口縁部付近。短沈線で矢羽根文様を描いてから隆帯上に縄文を施文している。II 181は深鉢C類の口縁部付近。II 182・II 183は紡錘文を描く胴下部。II 184の胴下部の縄文は縦位に施文されている。II 185は横走縄文の認められる深鉢底部。このほかに、図示はしていないが、定型的な石器も出土しているほか、石器とは思えない人頭大の礫も多数出土している。

S K 8 出土遺物 (II 186～II 218・II 267) II 186～II 195は深鉢A類。II 186の口縁内面は、縄文施文後に丁寧に撫でている。II 193では、口縁部と胴部を画する隆帯上やその下に横走縄文を施すのは、口縁部や胴部の沈線を引いた後であるが、それ以下の縦走縄文との先後関係はわからない。II 194は主文様と区画文とが隆帯で分断されていると思われる。II 196・II 197・II 267は深鉢B類。II 196は把手の上部に凹点をもつ。眼鏡状隆帯の上下部分を取り付けた後に楕円形区画文を描き、それに後続する区画内の矢羽根状沈線の充填は、上半が下半に先行する。その後に橋状の把手が取り付けられ、そして眼鏡状の区画上を縄文施文する。II 197は眼鏡状の隆帯が剥落したものと判断した。II 267は、8単位となる橋状の把手をもっていただけと思われる。把手の取り付け後に施文される眼鏡状区画の中は、下部の隆帯の脇にのみ区画沈線がはしる。区画内の矢羽根状沈線の充填は上半が下半

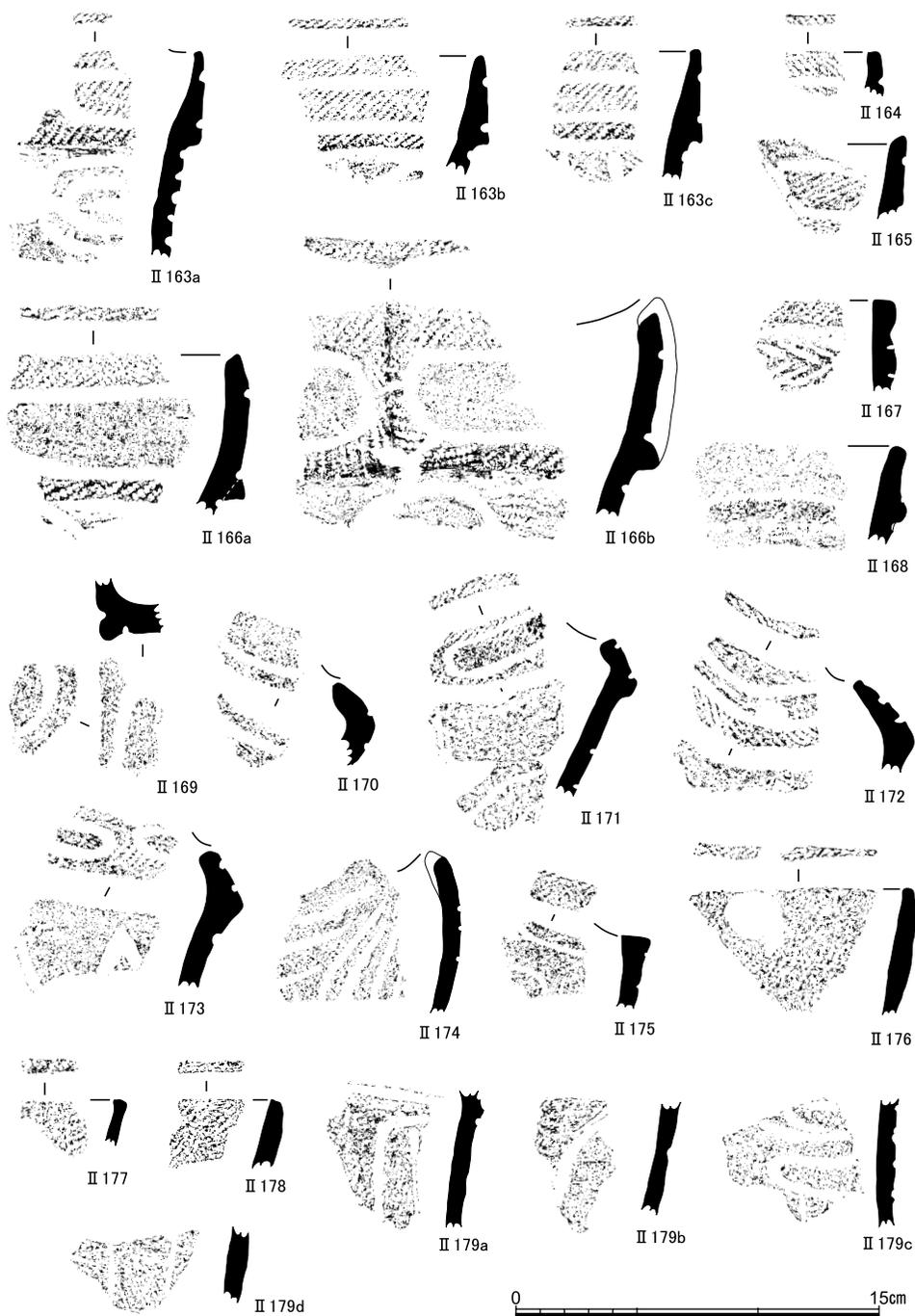


图55 S X 2 出土遺物(1) (II 163~II 179中期) 縮尺1/3

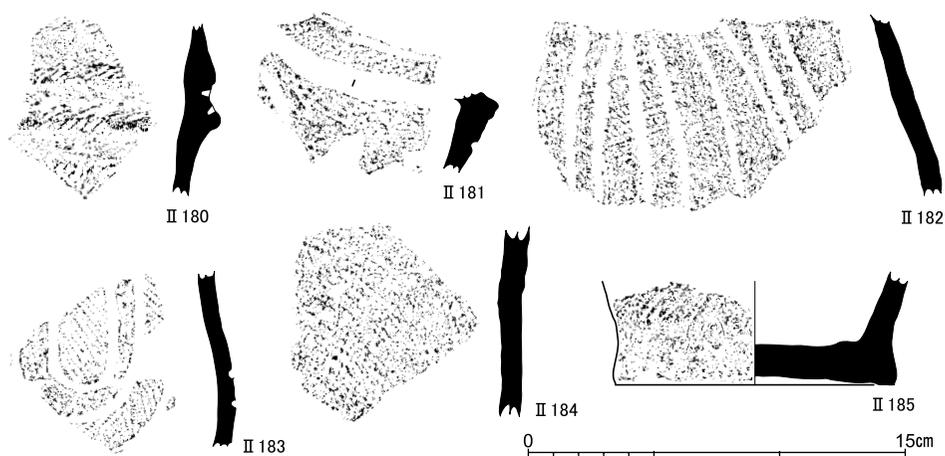


図56 S X 2 出土遺物(2) (II 180～II 185中期) 縮尺1/3

に先行し、眼鏡状の区画を縄文施文するのは、区画沈線の施文後である。II 198は波状口縁になる縄文のみの深鉢。II 199・II 200は外反する無文口縁だが、ともに、深鉢B類の可能性もある。II 201～II 203は、深鉢B類の口縁部付近で、いずれも橋状の把手をもつ。II 201は、眼鏡状隆帯の上下部分を取り付けた後に楕円形区画文を描き、それに後続する区画内の矢羽根状沈線の充填は、下半が上半に先行する。その後橋状の把手が取り付けられ、そして眼鏡状の区画を縄文施文する。II 204・II 205は、深鉢C類の胴上部と思われる。II 206～II 213は胴下部で、II 206・II 207・II 209は多重沈線間を縦走縄文で充填している。II 210には縄文が認められない。II 211は帯縄文で、II 212・II 213は横走縄文のみが認められる。II 214の深鉢底部には縄文は確認できない。II 215・II 216はボウル形の有文浅鉢で、どちらも小粒な縄文を沈線間に充填している。II 217は、屈曲部のある無文浅鉢で口縁部に把手をもつ。II 218は、外面が丁寧な撫で調整の無文浅鉢の屈曲部。

S K 35出土遺物 (II 219～II 264) II 219～II 228は深鉢A類。II 219は、口縁部と胴部との区分に隆帯を用いない。II 221の渦文の周囲は隆起している。II 229・II 230は深鉢B類で、II 229は、つまみ状の把手が剥離している。II 231～II 235は深鉢C類。II 236は、縄文のみの深鉢。II 237～II 239は、口縁部と胴部を隆帯で区分している胴上部で、II 240～II 247は、隆帯の確認できない胴上部。II 240は深鉢C類であろう。II 248～II 259は胴下部。II 248～II 250は、沈線と縄文を組み合わせているが、II 251・II 252には縄文は認められない。II 253は帯縄文で、II 254～II 258は横走縄文。II 254には、この時期の東海地方によく認められる結節縄文が認められるけれども、縄文の回転方向が東海地方の場合と異なる。

遺 物

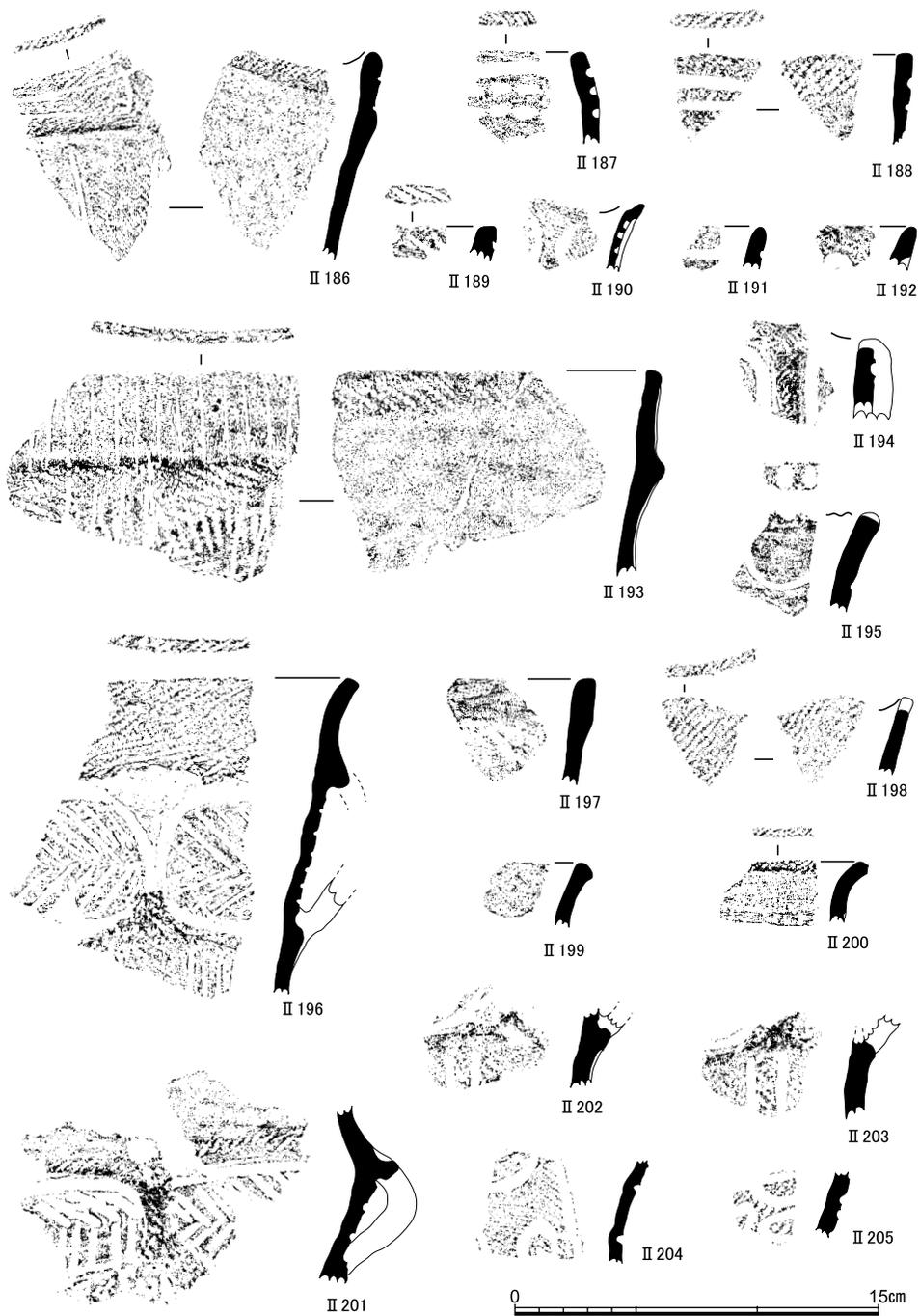


图57 S K 8 出土遺物(1) (II 186~II 205中期) 縮尺1/3

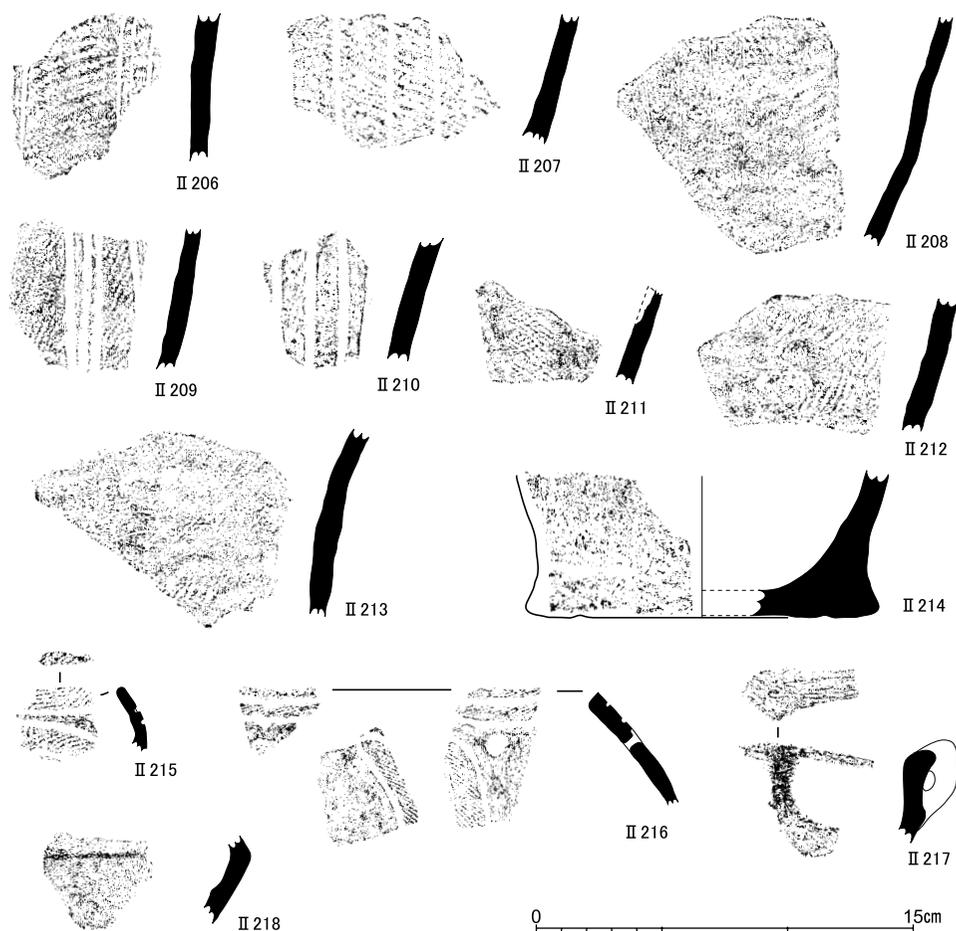


図58 S K 8 出土遺物(2) (II 206～II 218中期) 縮尺1/3

II 259には縄文が認められない。II 260・II 261は底部付近で、前者には横走縄文が認められる。II 262～II 264は深鉢底部。いずれも縄文は認められない。

S K 36出土遺物 (II 265) 深鉢B類の口縁部。橋状の把手を取り付けた後に楕円形区画文を描いている。区画内の矢羽根状沈線の充填は、下半が上半に先行する。眼鏡状の区画上を縄文施文するのは、区画内の沈線充填や把手状の沈線施文の後である。

S K 12出土遺物 (II 268) 厚手のミニチュア土器。横走縄文は、底部付近の撫でに先行しているが、胴部中央の穿孔に後続している。

S K 14出土遺物 (II 269) 脚部。台付土器は北白川C式には通常はなく、搬入品か。

そのほかの遺物 (II 266・II 270～II 336) 今回の調査では、縄文土器の中でも中期

遺 物

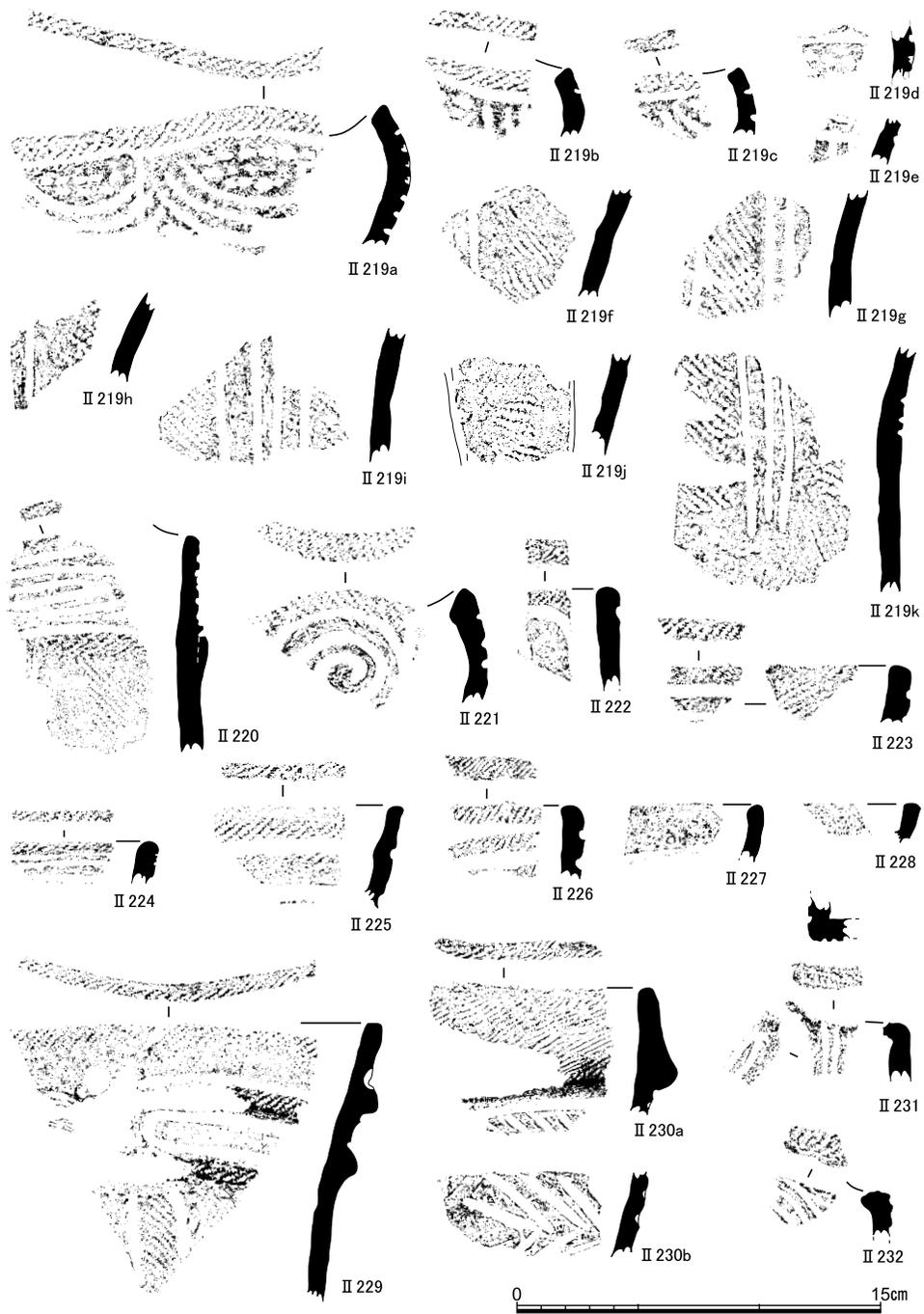


図59 S K 35出土遺物(1) (II 219~II 232中期) 縮尺1/3

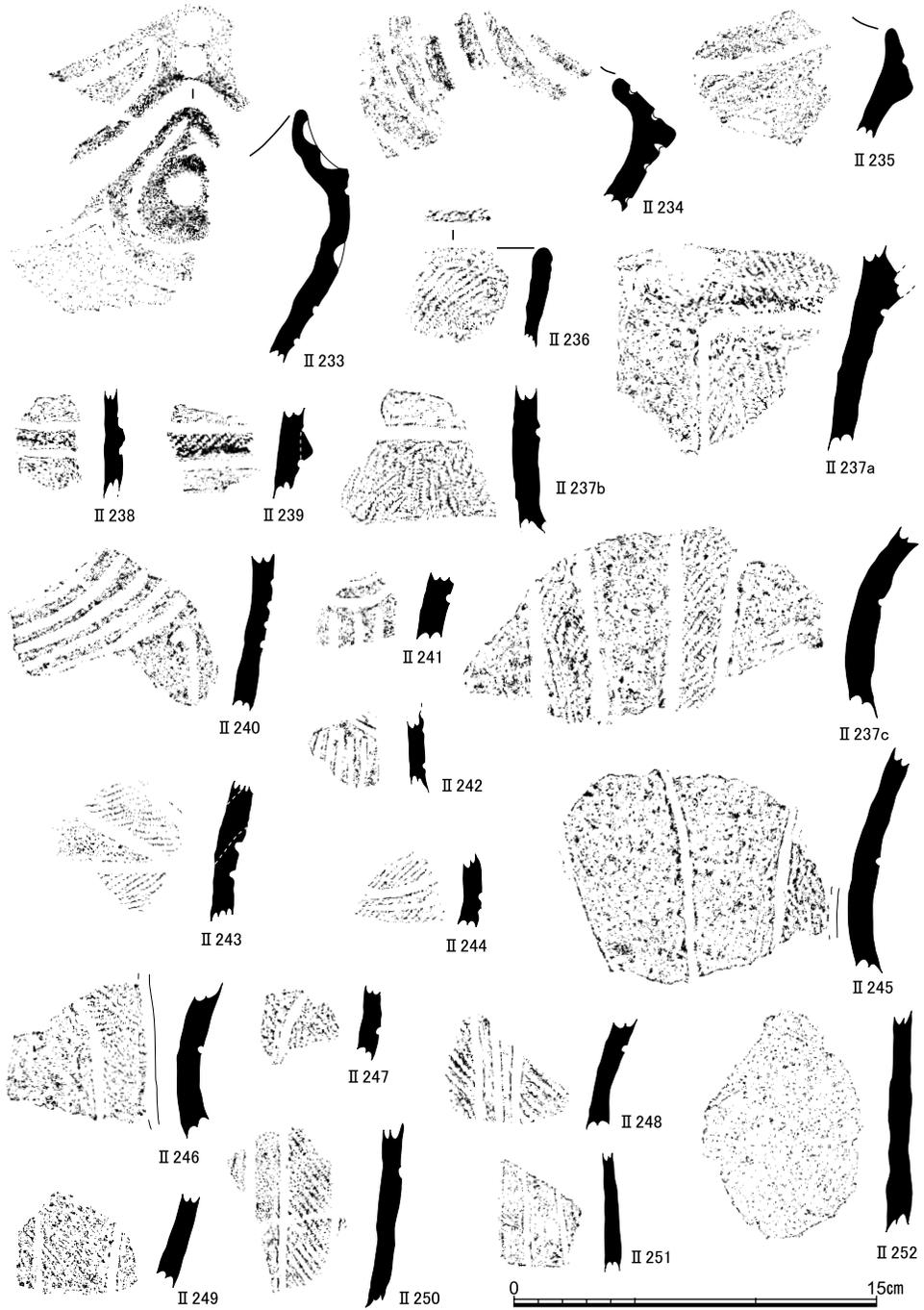


図60 S K 35出土遺物(2) (II 233~II 252中期) 縮尺1/3

遺 物

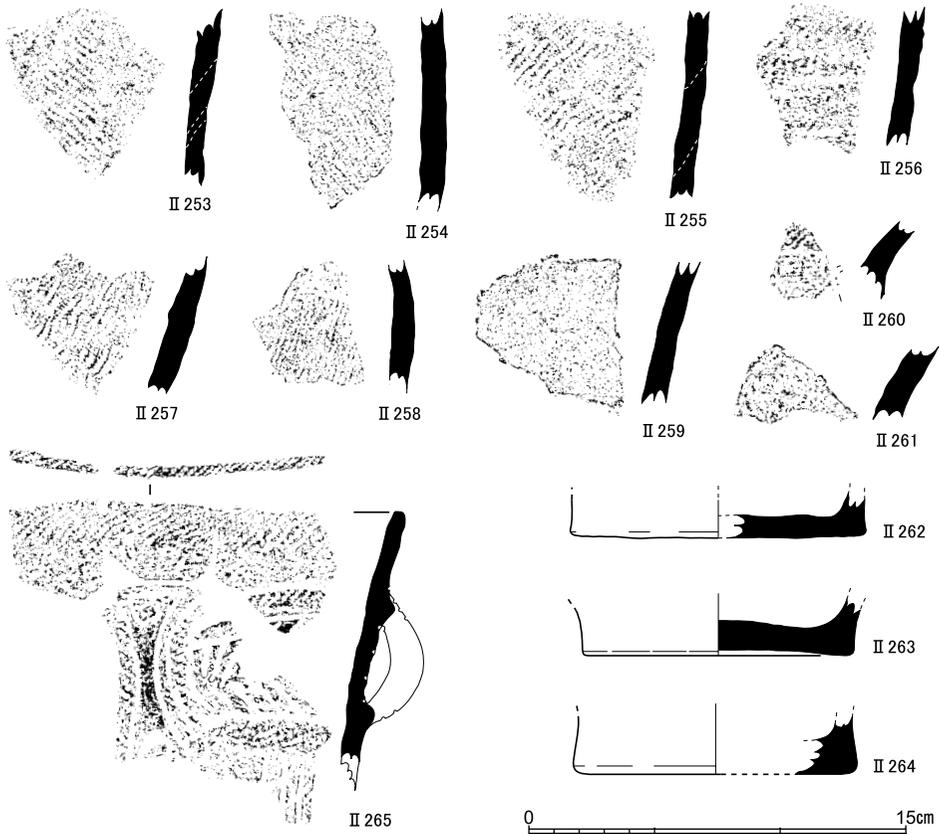


図61 S K35出土遺物(3) (II 253~ II 264中期), S K36出土遺物 (II 265中期) 縮尺1/3

末のものが全体の7割前後を占め、次いで中期後半のものが3割ほど出土している。北白川追分町遺跡の縄文中期末の土器については、北白川C式の標式遺跡としてこれまでもいくつかの地点から出土した資料が報告されており、今回の土器もおよその枠内におさまるものばかりであるので、ここではおもに、縄文土器編年研究に寄与と思われる中期後半の土器を図示しておく。

II 271・II 272は、早期前半の押型文土器で、大川式の古段階の深鉢胴部。II 273は前期中葉の北白川下層II a式で、II 274・II 275は前期末の大歳山式。

II 266・II 276~II 331は中期後半に帰属する。II 266・II 276~II 299は口縁部で、II 300~II 310は口縁部から頸部にかけて、そして、II 311~II 321は頸部から胴上部で、II 322~II 325は胴上部。II 326~II 329は底部である。これらのうちで深浅縄文は、II 276~II 278・II 286・II 300・II 301・II 316・II 320・II 321・II 324・II 328である。また、撚糸文は、II

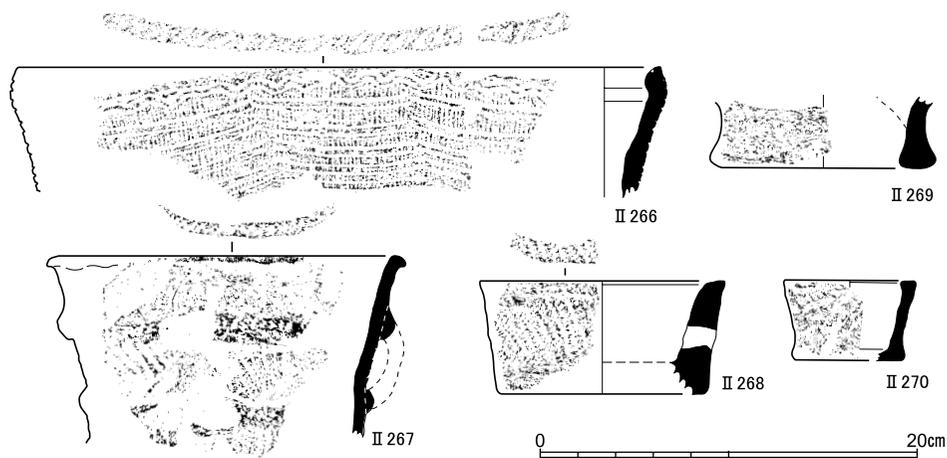


図62 S K 8出土遺物(3) (II 267中期), S K 12出土遺物 (II 268中期), S K 14出土遺物 (II 269中期), そのほかの縄文土器(1) (II 266・II 270中期)

279～II 285・II 287～II 290・II 292・II 294・II 295・II 302～II 309・II 311～II 315・II 317～II 319・II 322・II 323・II 325～II 327・II 329・II 330で、地文に縄文をもたないものは、II 296～II 299・II 331である。これ以外のものは縄文原体を特定しづらい。II 282は、棒状工具による沈線施文の後に交互刺突を施して蛇行沈線を模している。II 291は、連弧文の最上位に隆帯をつまむように貼付し、その胴部側にC字の刺突がはしる。II 292も、連弧文の最上位に隆帯を貼付しているが、その口縁側に逆C字の刺突がはしる。II 293も同様の弧状隆帯をもつが、前二者と異なって口唇部をつまみ上げている。II 294は、口縁の外表面は半截竹管状工具による施文だが、内面は棒状工具による刻み。II 295は、撚糸文の地文の上からおおぶりの渦文を描く隆帯を貼り付けている中富式。II 296は、直立気味の口縁外表面に半截竹管状工具による浅い蛇行沈線がめぐる。口唇部をつまみ上げているII 297は、地文をもたずに棒状工具で沈線施文する咲畑式。II 298・II 299は無文土器。

II 300は、口縁から3条の隆帯を垂下させてその隆帯上に押し引き状のC字刻みを施しているが、この口縁部文様帯を蛇行沈線によって無文の頸部文様帯と画している。II 304は、隆帯の上部のみに沈線がはしるが、その施文原体は棒状工具によるのか半截竹管状工具によるのか不明。暗灰色を呈するII 307は、均等に間隔の開いた整然とした撚糸地文に棒状工具で沈線施文している。中富式である。II 315の沈線の施文原体は、棒状工具の可能性はある。II 331は無文の底部で、断面形態は、中富式や咲畑式と同様に、平底になるかもしれない。

遺 物

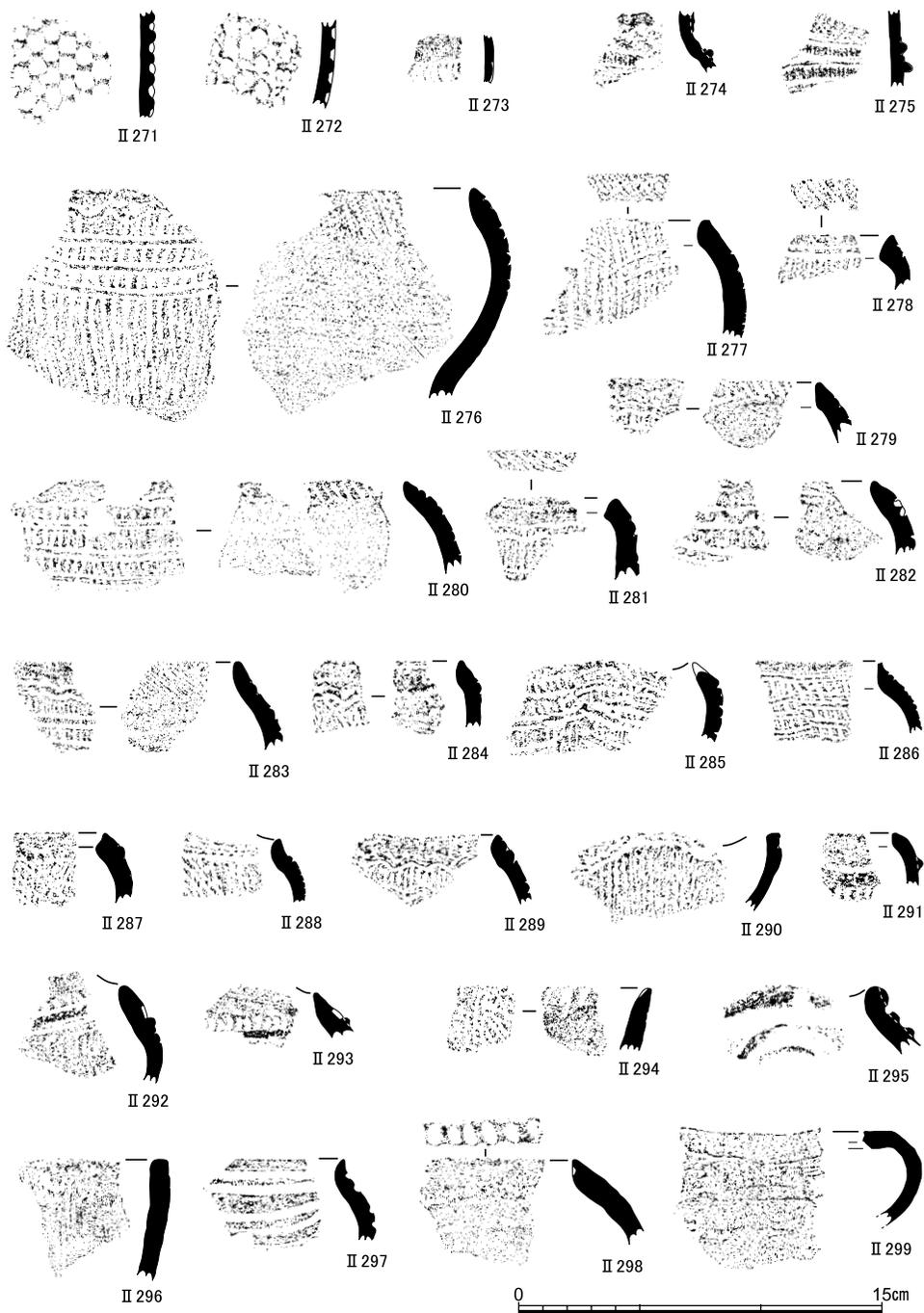


図63 そのほかの縄文土器② (II 271・II 272早期, II 273～II 275前期, II 276～II 299中期)
縮尺1/3

京都大学北部構内B F32区の発掘調査

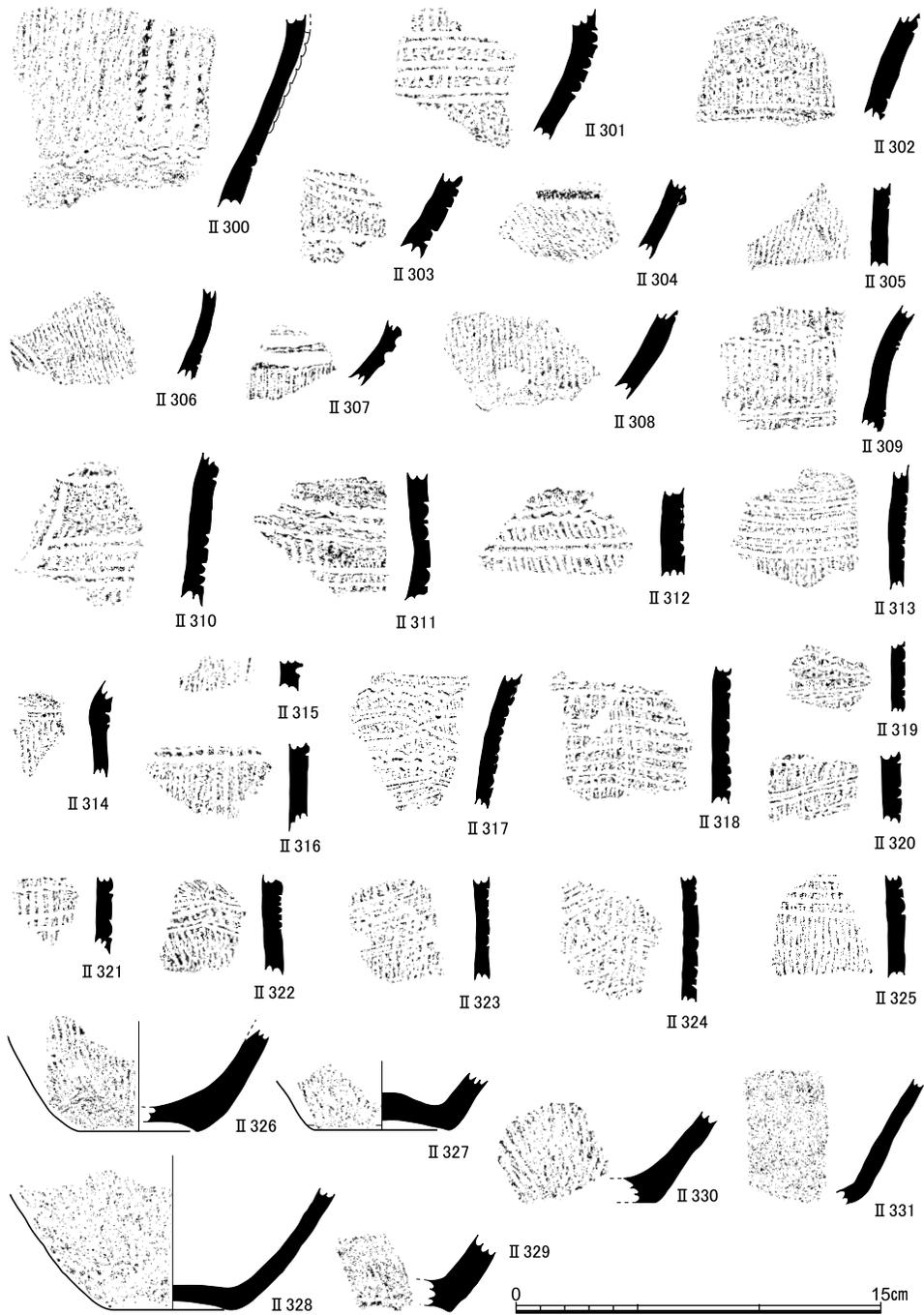


図64 そのほかの縄文土器③ (II 300~II 331中期) 縮尺1/3

これらⅡ266・Ⅱ276～Ⅱ331に代表される本調査区出土の中期後半の土器のうち、中富式や咲畑式などのような東海地方西部に特徴的な土器群に帰属するものを除く、船元Ⅳ式・里木Ⅱ式に相当する有文土器では、Ⅱ282・Ⅱ315以外はいずれも半截竹管状工具による施文のようで、棒状工具が用いられていることが明確なものはない。

Ⅱ270・Ⅱ332～Ⅱ335は中期末の破片。Ⅱ270は、薄手で内外面とも通常の撫で調整で無文のミニチュア土器。Ⅱ332は、東日本の縄文中期末の加曾利E4式の胴部破片。微隆起帯の撫でつけは、2段左捻りの縄文を切っている。色調や胎土や調整から見ても、近畿以东からの搬入品とみて間違いはない。Ⅱ333は、外面に赤色顔料の塗布された中期末の有文浅鉢。このほかに本調査区からは、少なくとも3点の赤色顔料付着土器片が出土しているが、時期を特定できるのはこの破片のみであった。Ⅱ334・Ⅱ335は、比較的大きな破片の底部と胴下半部で、いずれも中期末の北白川C式。Ⅱ336は耳栓。孔の開いている面には赤色顔料が塗彩されている。調査区西壁でわずかに確認できた中世の砂取穴と思われる土坑から出土しているが、中期末に帰属するものと思われる。

石器については、後世の遺構埋土などからも少なからず出土するが、縄文中期の遺構にもなうものも多く、とくに、SX3とその周辺、SK8・35など、多量の土器が出土した遺構からは石器も多く出土する。また遺物全体の出土を南方50mに位置する12・13地点と比べれば〔中村1974a・1975〕、土器は同程度と思われるが、定型的な石器はやや少ない。

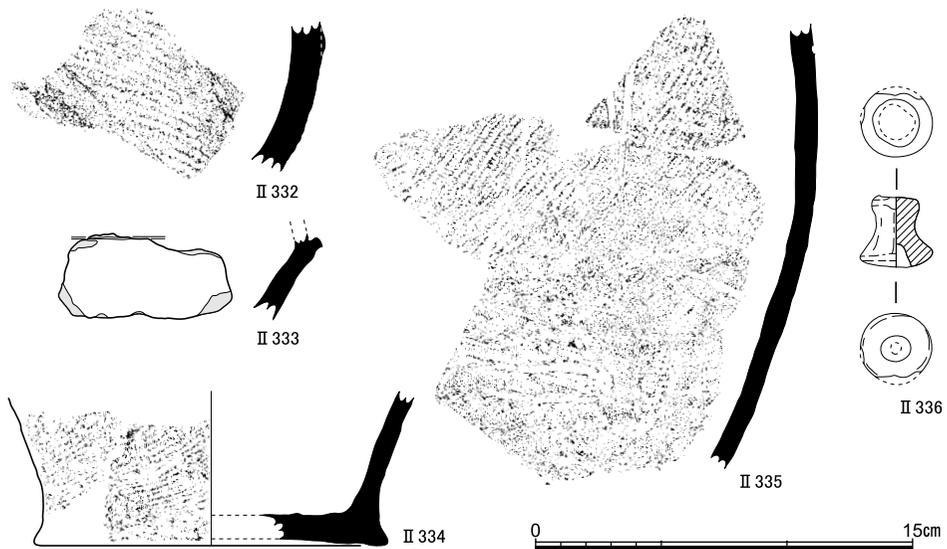


図65 そのほかの縄文土器と耳栓（Ⅱ332～Ⅱ335中期，Ⅱ336耳栓） 縮尺1/3

(2) 歴史時代の遺物 (図66～71)

一つの遺構から遺物がまとまって出土することはほとんどなかったが、おもな遺構の出土遺物について以下に略説する。

S D 22 出土遺物 (Ⅱ 337～Ⅱ 341) Ⅱ 337～Ⅱ 339は土師器で、いずれも淡橙色を呈する。Ⅱ 337の皿とⅡ 339の椀は「て」字状口縁のB₂類。Ⅱ 338の皿は二段撫で手法のC₃類。Ⅱ 340・Ⅱ 341は須恵器。Ⅱ 340は生焼けの鉢で、内面が乳白色を呈する。Ⅱ 341は坏ないし壺の底部。このほかに図示できない細片ではあるが、白色土器の三足の盤も出土している。S D 22は、11世紀の遺構と思われる。

S K 1 出土遺物 (Ⅱ 342～Ⅱ 348) Ⅱ 342～Ⅱ 346は土師器の皿と椀。いずれも一段撫で素縁手法で、Ⅱ 342・Ⅱ 345はE₃類、Ⅱ 343はE₁類、Ⅱ 344・Ⅱ 346はE₂類。色調は、Ⅱ 342・Ⅱ 343は淡橙色、Ⅱ 344・Ⅱ 346は淡桃色、Ⅱ 345は明褐色をそれぞれ呈する。Ⅱ 347は白色土器の皿。Ⅱ 348は外区に珠点をもつ三つ巴文の軒丸瓦。Ⅱ 347は古代の遺物であるが、この遺構の年代は14世紀と考えられる。

S K 2 出土遺物 (Ⅱ 349～Ⅱ 352) Ⅱ 349・Ⅱ 350の土師器椀は、一段撫で素縁手法E₁類で、淡橙色を呈する。Ⅱ 351は、緑釉陶器の椀の底部で、須恵質の焼成となっている。Ⅱ 352は、「大」字の連なる叩き目をもつ平瓦破片。凹面凸面ともに磨滅しているが、凸面には離れ砂が認められる。Ⅱ 351は古代の遺物であるが、この遺構の年代もS K 1と同じく14世紀と考えられる。

北辺の砂取穴群出土遺物 (Ⅱ 353～Ⅱ 357) Ⅱ 353～Ⅱ 356は土師器で、いずれも一段撫で素縁手法。Ⅱ 353の皿はE₂類で、Ⅱ 354・Ⅱ 356の皿はE₃類。Ⅱ 355の椀は、E₂類である。色調は、Ⅱ 353・Ⅱ 354は淡橙色、Ⅱ 356は明褐色、Ⅱ 355は灰白色をそれぞれ呈する。Ⅱ 357は白磁椀の底部で内面に圈線が巡る。この砂取穴群からの出土遺物は、量は多くないけれども14世紀頃より後の時代の遺物は出土していないので、室町時代の砂取穴群と理解できる。

S D 1 出土遺物 (Ⅱ 358～Ⅱ 363) 近代まで機能していたので、様々な時代の遺物が出土しているが、ここでは古代の遺物を中心に、特徴的な遺物を図示しておく。Ⅱ 358・Ⅱ 359は土師器皿で、いずれも淡橙色を呈する二段撫で手法のC₄類。この2点の土師器は、本調査区出土の土師器の中では最も遺存状態がよく、ともに完形に近い。灰白色を呈するⅡ 360も土師器皿で、一段撫で素縁手法のE₄類。Ⅱ 361は須恵器坏の底部。Ⅱ 362は青磁椀の底部。高麗青磁であろうか。Ⅱ 363は四耳壺と思われる白磁の肩部。

遺 物

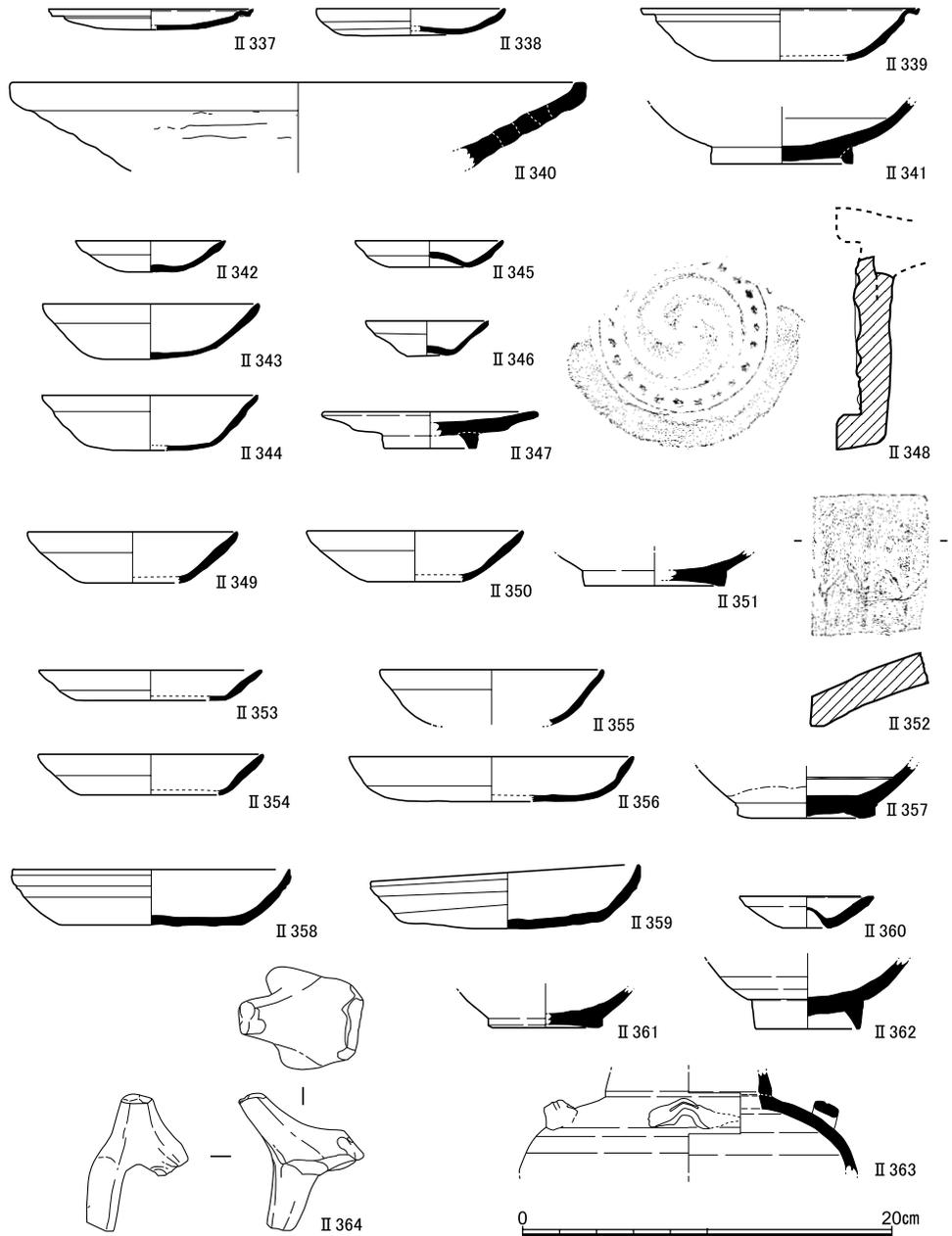


图66 S D22出土遺物 (II 337~ II 339土師器, II 340·II 341須惠器), S K 1 出土遺物 (II 342~ II 346土師器, II 347白色土器, II 348軒丸瓦), S K 2 出土遺物 (II 349·II 350土師器, II 351綠釉, II 352平瓦), 砂取穴出土遺物 (II 353~ II 356土師器, II 357白磁), S D 1 出土遺物 (II 358~ II 360土師器, II 361須惠器, II 362青磁, II 363白磁), 黑褐色土出土遺物 (II 364土馬)

このほかに、包含層や表土から出土した遺物のうち、土馬と五輪塔・墓石についても略説する（Ⅱ364～Ⅱ378）。Ⅱ364は、土馬の前半身。図示したものはもっとも残りの良いもので、古代の遺物を含むことの多い黒褐色土から出土している。このほかに、同じような色調を呈する土馬と思われる破片は、表土や中世の遺物包含層や古代の溝S D22などからも出土している。

調査区西北辺からは、中近世の五輪塔や墓標が14点出土した。多くは、横倒しになり東西方向の石列となるように据え置かれていたが、S D1の最終段階の南肩となっていた可能性が高い。Ⅱ365～Ⅱ368は五輪塔。Ⅱ365は、組合式の五輪塔の空風輪で、空輪のうちで遺存する二方および風輪のうちで遺存する三方には、梵字が刻まれている。Ⅱ366は地輪を欠く一石五輪塔で、各輪に、同一方向を向くようにそれぞれ梵字が刻まれている。Ⅱ367は組合式の五輪塔の火輪。四面にそれぞれ梵字が刻まれている。Ⅱ368の五輪塔は成人女性の墓で、地輪の正面には、阿弥陀如来を意味するキリークと思われる梵字の下に、「寛永十四丁丑年」（1637）・「花屋清栄禅定尼」・「九月四日」と浅く刻まれている。上部には水輪の一部が残存している。

Ⅱ369～Ⅱ374は箱型の墓標。Ⅱ369は若くして亡くなった女性の墓で、正面の枠内には、梵字キリークの下に、「天和三年」（1683）・「壽皓童女」・「七月十八日」という銘文をもつ。銘の彫り込みは細くて深い。裏面には幅3cm前後のノミの痕が多数認められる。Ⅱ370は成人女性の墓で、各面が丁寧に整形されている。正面枠内に「涼澗院浄室清元善女」、左側面に「正徳三癸巳歲閏五月十七日」（1713）、右側面に「窪甲斐守狛進□□女 西村氏女」とそれぞれ深く刻まれている。Ⅱ371は、上部を欠損しているが、各面とも丁寧に整形している。正面の枠内に「□□義英居士」・「□岳恵澄信尼」・「閑月妙照信女」、左側面に「宿坊 浄土院」、右側面に「□□三丙寅年八月十二日」「□□五戌子年十月朔日」とそれぞれ刻まれており、いずれも彫りが深い。元号と干支との組合せから、右側面の右側の年号は貞享三年（1686）ないし延享三年（1746）、左側の年号は宝永五年（1708）ないし明和五年（1768）と考えられる。正面の銘文の配置からみて、夫婦かもしれない上段の二人が逝去した当初からこの墓に下段の一人を葬ることが意図されていたと思われるので、右側面の年号も、中央に位置する左側の銘文のものの方が新しいのであろう。なお、戒名の「居士」は、江戸時代には百姓には用いなかったようである。Ⅱ372は、正面の枠内に「浄月光輪信女」、右側面に「宿坊 養春院」の銘文をそれぞれもつ。銘文のない左側面と背面は幾分整形が粗い。

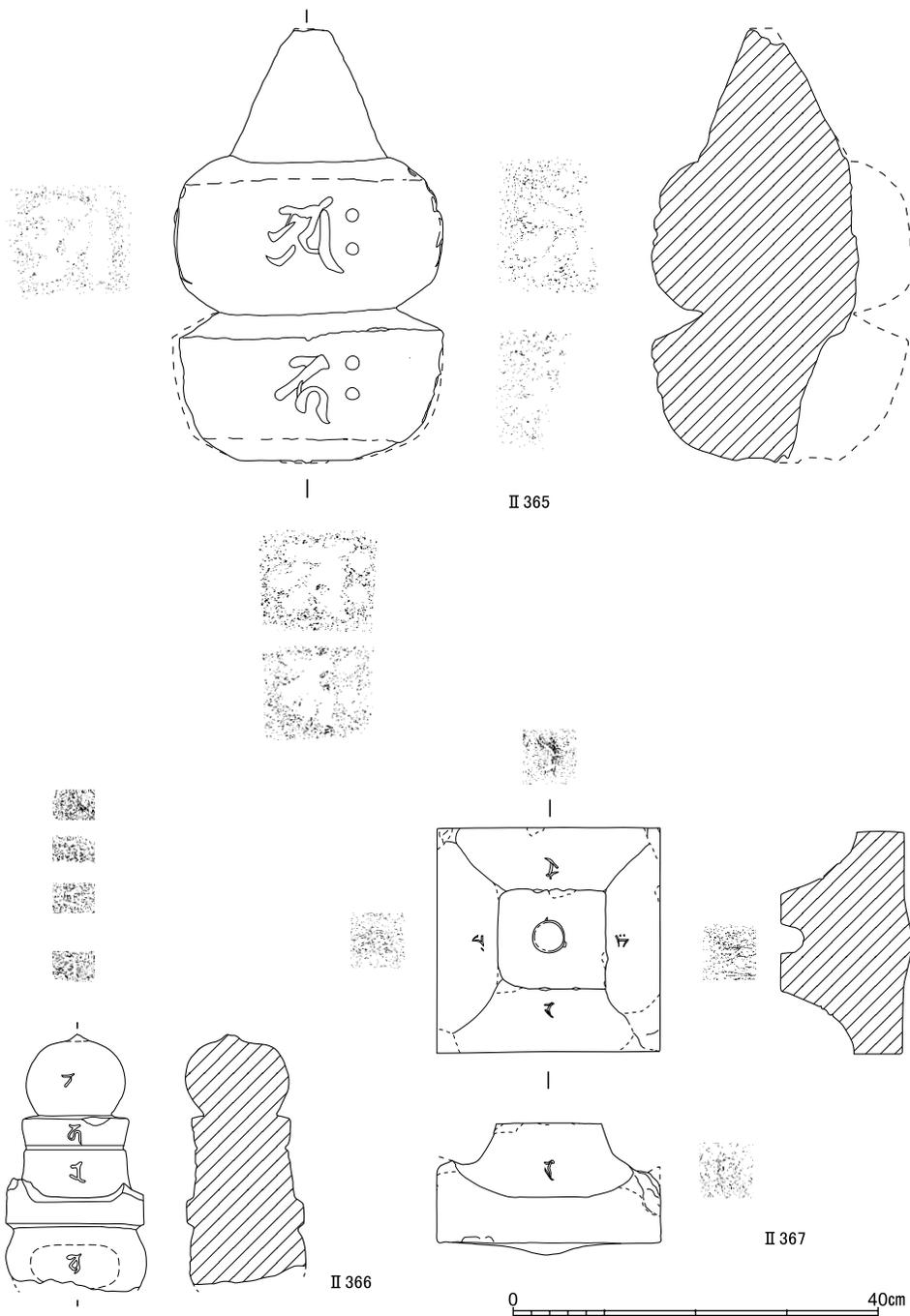


図67 五輪塔(1) 縮尺1/8

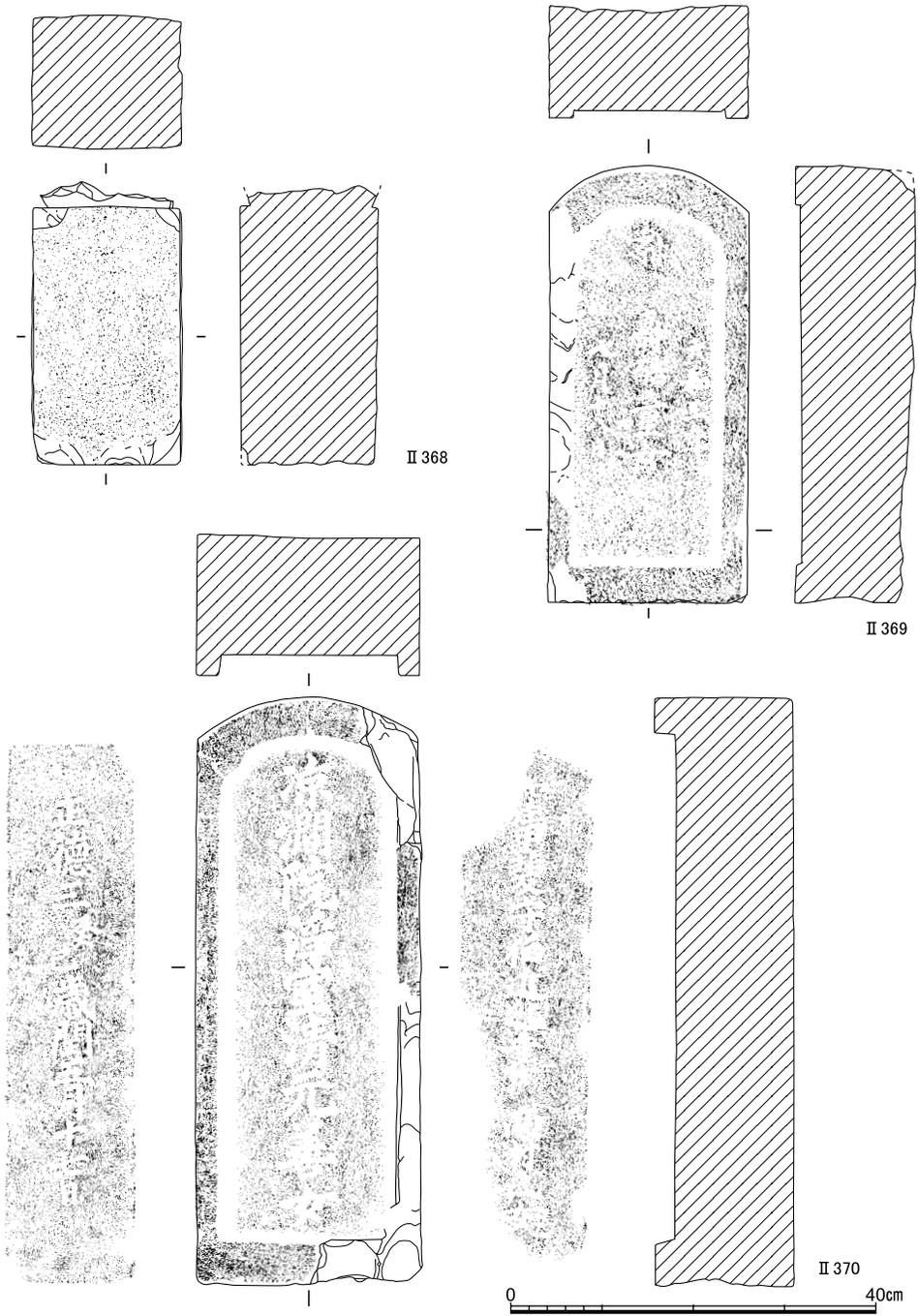


図68 五輪塔(2)・墓石(1) 縮尺1/8

遺 物

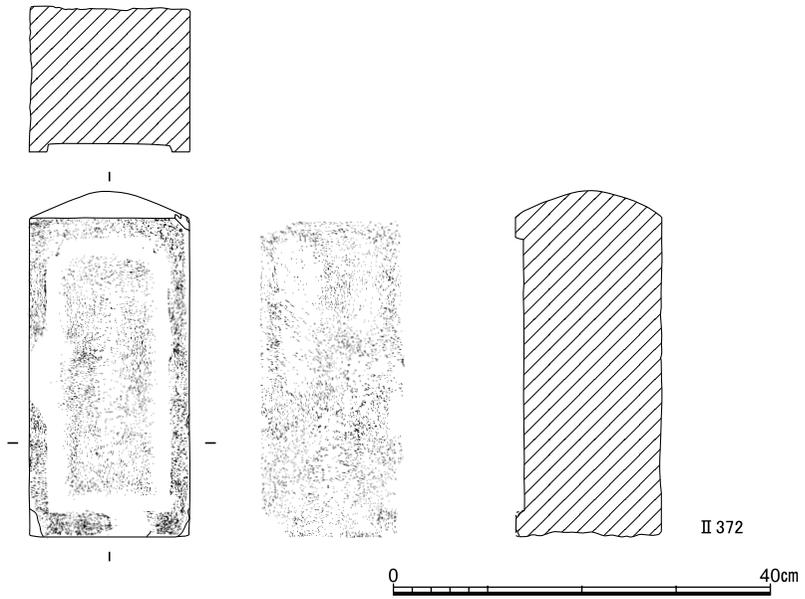
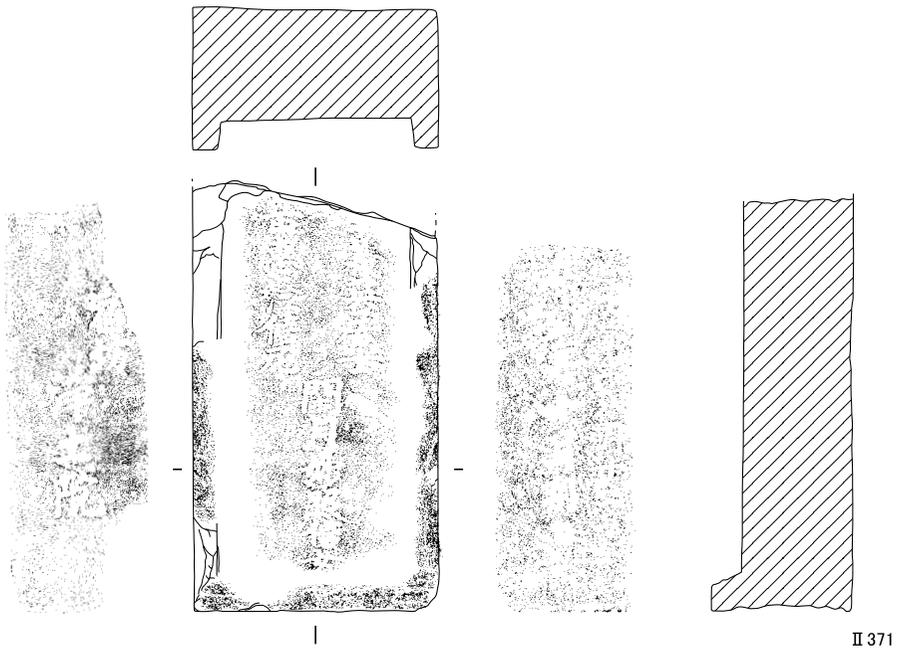
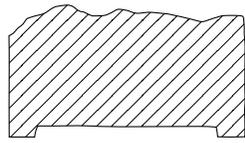


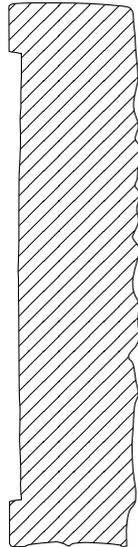
图69 墓石(2) 縮尺1/8



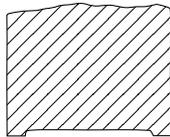
I



I



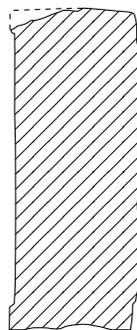
II 373



I



I



II 374



図70 墓石③ 縮尺1/8

遺 物

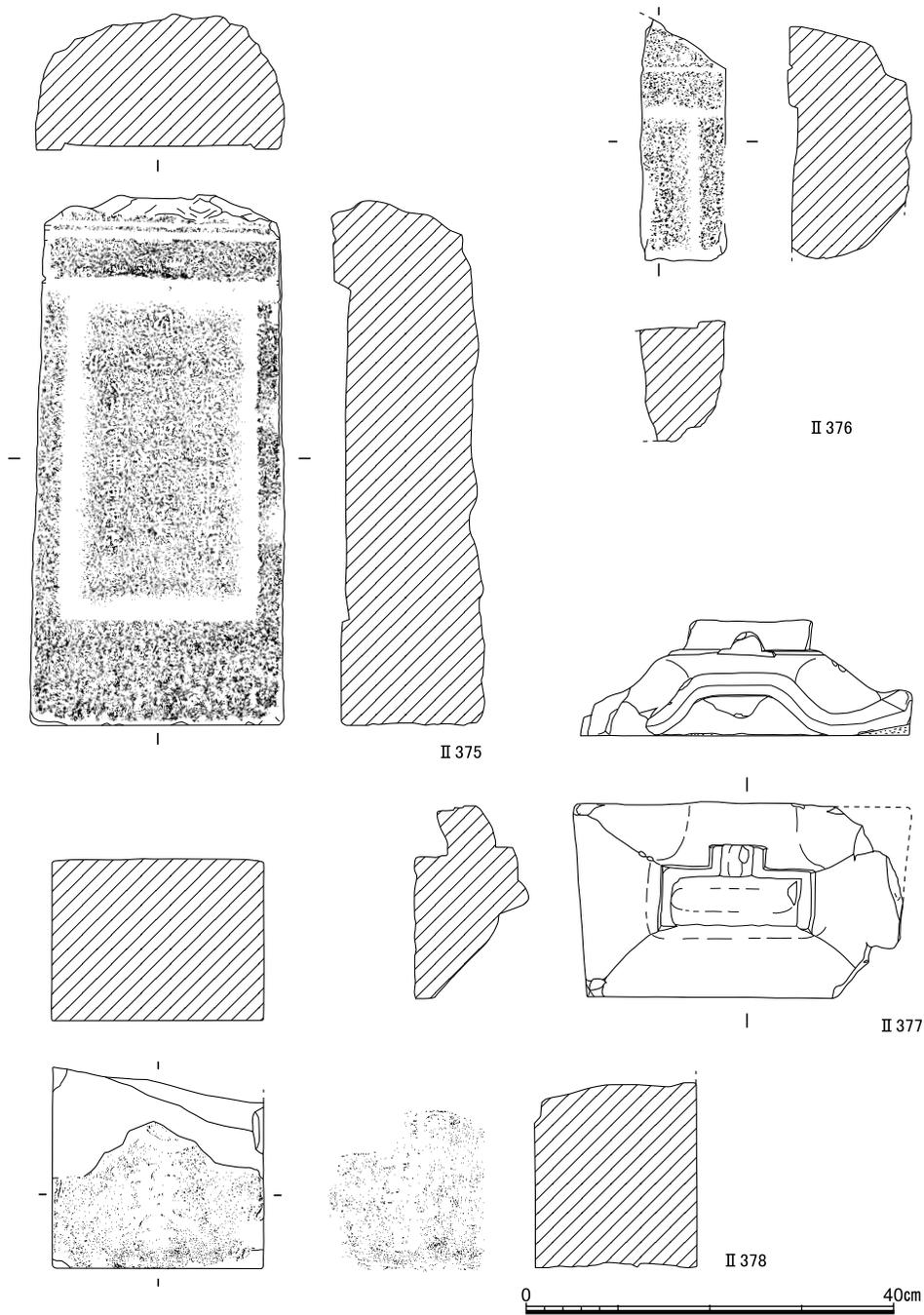


图71 墓石(4) 縮尺1/8

Ⅱ373は、正面の枠内にのみ銘文がある。中央上部に梵字キリークをもち、その下には、「覚誉浄慶信士」・「融誉妙圓信女」・「光月妙仙信女」と、幅の割に深い彫りで刻まれている。背面は右上部以外は幅5cm前後のノミ痕が残る。Ⅱ374は、正面には枠内に、梵字キリークの下位に「尊誉誠心信士」、右側面には「いづゝや喜兵衛」と、それぞれ深めに刻まれている。背面には細かなノミ痕が多数残っている。Ⅱ375は板碑型の墓標。上部の枠が後背のように正面にひときわ突き出ている枠囲みの墓標で、上部の枠の上方に2条の刻線をもつ。背面は粗削りのままである。正面の枠内のみ銘文があり、いずれも浅くて細い。上端中央部の梵字キリークの下には横書きで「逆修 逆修」とあり、その下には「徳誉道甫禪定門」・「三界万靈六親集」・「心月栄甫禪定尼」とある。「逆修」とは、生前に冥福を祈る仏事を済ませることであるから、正面両側に名を刻んだ二人が生前供養をしたことがわかる。Ⅱ376も板碑型と思われ、上部の枠が正面にひときわ突き出ている枠囲みの墓標で、上部の枠の上方に1条の刻線をもち、背面は荒削りのままである。正面の枠内に「覚□□」の3文字があることまでは確認できる。Ⅱ377は、墓標の上部を飾る唐破風の笠である。Ⅱ378の墓標は、各面とも丁寧に整形しており、銘文は彫り込みも深い。この墓標のみは、戒名を用いなかったようで、また正面の箱型や板碑型のような枠囲みもない。なお、本調査区南方の12・13地点の調査時にも、こうした近世の墓石は出土していたようであるが、それらの墓石は現在は、本調査区出土のものやそのほかの無縁仏とともに、北部構内北辺に集合的に安置されている。

5 小 結

先史時代の地形環境 本調査区では、洪水砂層の下位の堆積が複雑なので、四壁や畔など数カ所で断面観察を実施した(図37~40)。また、調査区西辺では深部掘削立合調査もおこなった。ここではその知見をもとに、白川系流路の動きなどを考えてみる。

調査区西辺の立合調査で、標高57m前後に、厚さ20cm前後の灰白色粗砂を挟むようにして、それぞれ厚さが30cm前後で10~20cm大のチャートや頁岩を主体とする、2枚の褐色礫層を確認した。どちらの褐色礫層も長軸10cmほどの花崗岩の角礫を1~2割程度含む。そして北に進むにつれて、間に挟まれる灰白色粗砂層は薄くなっていくとともに、上下の褐色礫層も、薄くなりながら礫のサイズも減少させ、さらには花崗岩の比率を高めていくように思われた。本調査区ではこれより上位には、こうしたチャートや頁岩をある程度含む砂礫層は確認できていない。ところで、100m西の白川扇状地末端に位置する56・229地点で

小 結

も、57～58mあたりで、それより上位では花崗岩の砂礫層だけで存在を認められなかった褐色砂礫が堆積しており、56地点では礫種の分析から高野川系の堆積物とされ〔竹村ほか1985〕、229地点でも礫相から同様に判断されている〔千葉1998〕。しかし両地点とも、白川系と考えられる灰白色の砂層を褐色砂礫に介在させることはないようである。そして229地点では、褐色砂礫の厚さは、50cm以上、ところによっては1mほどに達している。さらに56地点では、褐色砂礫の厚みは3.4m以上の地点もあるほどに厚く、また56地点東南辺では、褐色砂礫の下位に花崗岩粒を主体とする砂やシルトなどが互層となって潜り込むような観を呈しているようである。しかも56・229地点では、堆積年代は縄文後期以前であり、白川系流路の影響をほとんど受けていない高野川系流路の河道だったのに対し、本調査区では、縄文前期以前の砂層より5mほど下位に位置し、高野川系流路と白川系流路との合流部だった可能性さえある。ここでは、本調査区の褐色礫層は、56・229地点の褐色砂礫とは対応はしないそれ以前の堆積物と考えておきたい。

ここから標高61.5mあたりまでは、黄白色基調でときおり褐色化している粘質土層や、灰白色基調で5cmを超える角礫などもまじえる花崗岩起源の砂礫～シルトなどが互層をなして堆積している。暗黒褐色砂質土Ⅱを境に、その下位では、灰白色粗砂・砂礫層には、長軸5cm以上の花崗岩の角礫が多数含まれる場合もあるが、その上位には、角礫も5cmを超えるような礫も、暗黒褐色砂質土際に局所的に残留した洪水砂層以外には認められない。このように、暗黒褐色砂質土Ⅱの形成以前にもある程度の期間にわたって陸化したことも度々あったようだが、土壌化は進まず、人工遺物も確認できていない。

暗黒褐色砂質土Ⅱの母胎は、西辺や中央付近では堆積構造のはっきりわからない粗砂層で（図38第17層、図39第15層）、南辺では粘質土だが（図39第19層、図40第18層）、土石流に特徴的な上方粗粒化の堆積が見られる部分も調査区東北部にある（図版12-6）。これらは、氾濫などともなう一連の堆積だろう。上方粗粒化の堆積はほかにも、暗黒褐色砂質土Ⅱより下位の黄白色粘土層の直下でも、調査区西壁（図38第32層）で認められる。

暗黒褐色砂質土と白川　ここで、安定した環境下にあった暗黒褐色砂質土Ⅰ・Ⅱの2つの旧地表面について検討しよう。暗黒褐色砂質土の分布は、図44・45で図示した以外でも、西壁の北辺および南辺で同程度の標高に確認できるが（図38）、北辺のものは2枚のどちらに対応するかは判断できない。年代的には、確実なことは、アカホヤ火山灰の降灰よりは古いということだけであって、縄文前期以前としか言えない。だが、後世の地層からは京都盆地内で最古の縄文土器出土例となる早期前半の大川式古段階の胴部破片が2点

出土していること、そして100m東方の221地点では大川式新段階ないし神宮寺式の砂質土層が確認されていることなどから〔千葉1998〕、暗黒褐色砂質土Ⅰと暗黒褐色砂質土Ⅱの双方ないしいずれかの年代は早期前半頃だった可能性はある。

本調査区の北東約600m、すなわち白川流域という点では本調査区の上流部に位置する北白川廃寺下層では、それより新しい時期で黄島式ないしその直前頃に比定される竪穴住居跡を、白川の「氾濫堆積」に完全に覆われた状態で検出しており、しかもその住居跡の下に広がる厚さ1mほどの遺物包含層は、神宮寺式に後続する黄島式直前頃である〔網1994〕。また、そのすぐ南でも、縄文後期の包含層の直下に、60cm厚のにぶい黄褐色の砂質層とさらにその下位に厚さ10cm以上の砂質土壌化層が広がる〔吉村・伊藤1996〕。本調査区では、上記のように、暗黒褐色砂質土Ⅱの直下にも、それより下位の黄白色粘土層の直下にも、土石流ないし氾濫性の堆積が認められ、また、暗黒褐色砂質土ⅠもⅡも、それぞれラミナを確認できない砂に覆われており、これも氾濫起源の可能性がある。白川の上流域は花崗岩地盤なので、土砂移動は頻繁に起こりやすく、北白川廃寺下層での氾濫堆積と、本調査区のそうした堆積物との年代を対比させることは躊躇されるが、暗黒褐色砂質土Ⅰ・Ⅱは縄文早期頃の地層と考えておきたい。

暗黒褐色砂質土Ⅱは、調査区東南部を中心に氾濫に見舞われ(図39第12層、図40第14層)、その堆積によって西下がり傾斜が多少きつくなってから、再び安定化して暗黒褐色砂質土Ⅰが形成される。そしてここでもまた、今度は比較的広く氾濫に見舞われる(図39第10層、図40第11・11'層)。ここまでは縄文前期以前のことである。

その後、今度は調査区北半を深く大きく抉るように白川系の流路が流れ込み、部分的には3m近くに達する厚い洪水性堆積層をもたらした。白川系流路の洪水は、基本的には東から西への流向を示す。しかし増田富士雄氏から、東壁では、南東から北西へという流向の層群を切って北東から南西へという層群が見られ、また調査区西南部の攪乱の北壁でも、調査区西壁でも、洪水堆積層は北東方向からの流向であって、扇状地特有の河道のシフトが見られる、さらには、東壁北辺の堆積相から見て、この流路の川底は暗黒褐色砂質土の残存北限から10mほど北側と考え得る、とのご教示を得た。この洪水砂層の上面は、後世の削平を受けているとはいえ、東壁南端では標高63.4m、西壁でも62.8mである。この洪水が去った後、安定した環境となって洪水砂層が土壌化し、明茶褐色の砂質土やシルト質土が形成されて、いよいよ縄文中期後半から北白川追分町遺跡一帯の活発な利用が始まるので、洪水は中期中頃までにはおさまっている。そして、後期には主たる河道は、

125・180地点を経て本調査区の南側へと移っている〔泉・三宅1986、浜崎・千葉1990〕。

縄文時代の建物跡 土坑などが有機的に関連をもっている遺構群が2カ所で確認できた。SX3と周辺ピット群、そしてSH1である。まず、焼土SX3とその周辺で検出されたピット群については、中期末の住居跡だった可能性は完全には否定できない。しかし、本調査区北隣の123地点では、同じく中期末の竪穴住居跡が2基検出されているけれども、それらはいずれも方形になるとと思われる周溝をもっていて、また、わずかながらも壁の立ち上がりが確認できている〔清水1984〕。これに対して、SX3と周辺ピット群においては、この一帯からややまとまって遺物が出土したとはいえ、そしてSX3の焼土が5cmほどの厚みで確認できたとはいえ、壁の立ち上がりだけでなく床面硬化も認められなかった。以上から、あまり長期間にわたっては利用されなかった平地式住居の可能性は否定しないが、竪穴住居だった可能性はないと判断している。

これに対して、2列×6列（以上）の柱穴列SH1は、その各土坑の規則的分布から現代の果樹栽培用の掘削坑である可能性は否定しきれないものの、埋土は単純な明茶褐色砂質土であり、包含している遺物も縄文中期末までにおさまるので、縄文時代の建物跡と考えている。形態的には、掘り込みを確認できていないことから、平地式だったと思われる。さて、縄文時代の方形柱穴列は、通常の住居と考えられるものも多くあるようで〔石井2007〕、また、本調査区からは、ミニチュア土器や赤色顔料を塗布した土器なども出土してはいるが、土偶や石棒などは認められない。その一方で、123地点の同時期の住居址をはじめ、縄文時代の西日本の通常の住居に比べると、SH1では、柱穴は直径も深度も著しく大きいのが、炉を確認できていない。以上のことから、SH1は、祭祀的な建造物とみなす必要はないが、通常の住居とは異なる施設と考えるべきかもしれない。

縄文中期後半の土器 中世に攪乱を受けているとはいえ、SK4からは中期後半に位置づけられる土器しか出土していない。また、SK15でも、中期末の北白川C式が1点出土するものの、ほかはすべてやはり中期後半の土器ばかりであった。今回の調査で出土した3000余点ほどの縄文土器のうち、中期後半に帰属するものは、前節で述べたように、その3割前後と思われるけれども、この中期後半の土器のうちの有文土器のほとんどは、沈線を施文する際に半截竹管状工具のみを用いている。そして、数少ない棒状工具施文のものは、沈線の太さや撚糸の条の間隔の広さや刺突の位置などから見て、東海地方に主体的に分布する中富式ないし咲畑式と（Ⅱ6・Ⅱ16・Ⅱ23・Ⅱ27・Ⅱ53・Ⅱ54・Ⅱ295・Ⅱ297・Ⅱ307・Ⅱ331）、それに併行する未命名のもの（Ⅱ22）のほかには、里木Ⅱ式の範疇でと

えられるのは2点（Ⅱ282・Ⅱ315）しかない。

南に近接する12・13・123地点では、半截竹管状工具による施文のものが多くとはいえ、棒状工具によるものも一定量は出土している〔中村1974a・1975, 清水1984〕。一連の遺跡でこれ程近接しているので、この出土傾向の違いを本調査区との時期差とみなすことは避けたいが、少なくとも、SK4のありかたをみると、半截竹管状工具のみによる施文をしているもので構成される段階が存在するようで、これは、従来の型式学的仮説〔矢野1993など〕を裏づける。そして年代的には、咲畑式ないしはいわゆる里木Ⅲ式の成立以前に位置づけられる。この段階の遺構一括資料は里木Ⅱ式の分布圏では数少ないが、同様の特徴をもつ比較資料としては、東では岐阜県戸入村平Ⅱ遺跡12号住居の床面出土土器と埋設土器から成る一群を〔板東編2000〕、西では岡山県津島岡大遺跡第21次の縄文土坑出土土器群を〔野崎編2003〕、それぞれ指摘できる。この後に続くのが咲畑式併行期であり、その時期になると併行関係をうかがえる遺構一括出土資料が西日本に点在する〔富井2005〕。

歴史時代の遺跡 室町時代に埋積した砂取穴は、白川砂の採取を目的として掘削された堅穴群で、同様の堅穴群は221地点でも確認されている。本調査区の砂取穴群は、基本的には、緩斜面の下側から斜面上方へと東方に展開している。対象とした洪水砂層の中でも粒度の大きい粗砂層を狙っているが、その洪水層の砂とシルトとの分布のおよその境界（図41の破線）よりも南側にあるSK1・2は、粗砂を効率的には採取できていないと思われる。調査区北側の堅穴群に対して、試掘的な意味合いをもっていたのかもしれない。

近世に発生した地震ともなう噴砂の砂脈数条が、この砂取穴の埋土にときおり確認できる粗砂の帯状の埋積部から、はしり始めている（図37）。地震の年代を特定することはできなかったが、本調査区から300mほど東の本学北部構内東縁も通っている花折断層の活動によるとされる近世前期の寛文2（1662）年の大地震、あるいは、慶長元（1596）年のいわゆる慶長伏見大地震ともなうものと考えている。

発掘調査および整理調査は、富井眞と吉江崇が担当し、磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・長尾玲・坂田千尋・鈴木敬寛・中津香枝・桃井宏和・山本幸二・和田仁明が測量・実測などの作業にあたった。また以下の方々より有益なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。地形・堆積物に関して増田富士雄氏（同志社大学）、諏訪浩氏（本学防災研究所）、（故）那須孝悌氏。縄文早期土器に関して矢野健一氏（立命館大学）。